國學院大學学術情報リポジトリ

新潟県と京浜地域の浴場業者：県人会名簿及び浴場組合名簿の分析を中心に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉田, 律人
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000856

新潟県と京浜地域の浴場業者
―県人会名簿及び浴場組合名簿の分析を中心に―

吉　田　律　人

キーワード
都市形成史　都市移住者　浴場業（銭湯）　京浜地域　新潟県

はじめに

日本の近代化は農村から都市への人口移動を加速させ、多くの移住者を生み出した。特に「裏日本」と位置づけられた日本海側は、「表日本」、すなわち太平洋側発展の礎としてヒト、モノ、カネの供給源となっていった。そうしたなか、移住者たちは地縁や血縁を結節点とする同郷者集団を形成、特定の業種を介しながら新天地に根づいていく。例えば、都市生活者に入浴の機会を提供する銭湯、「浴場業」はその典型であった。

京浜地域の浴場業者に新潟県を含む北陸地方出身者が多いことはよく知られている(1)。例えば、「裏日本」論を展開した古厩忠夫は、浴場業者の出身地として新潟県西蒲原郡中之口村（現・新潟市西蒲区中之口地区）を挙げたほか(2)、1990（平成2）年8月に刊行された『新潟県の百年』において、「正確な統計がないが、聞き取りによれば、東京の公衆浴場の最盛期の昭和十四、五年ごろ二八〇〇軒、その約半数は新潟県人の経営になるものであったという」と述べている(3)。また、人文地理学者の金崎肇も石川県の能登地方出身者が都市部の浴場業に従事している点を指摘、特に横浜市の伊勢佐木町周辺の浴場が鹿島郡崎山村（現・七尾市）出身者で占められている点を明らかにした(4)。新潟県人や石川県人が京浜地域の浴場業を担ったのは間違いないだろう(5)。

そうした北陸地方と浴場業との関係については、人文地理学や社会学、民俗学の分野で研究が進んでおり、連鎖移住の構造など、主に大阪の浴場業者と石川県との関係が明らかになっている(6)。一方、東京の浴場業者と新潟県との関係については、谷口貢が同郷者集団の形成や出郷者の故郷観を解析したほか(7)、山口拡はその視点を継承しつつ、経営

者のライフヒストリーから「同郷」の意義付けを行った[8]。これらの研究から戦後の浴場業界の構造は明らかになったものの、関係者への聞き取り調査が中心のため、戦前の状況はほとんど解明されていない。戦後の状況を考察する前提として、戦前の実態はどうだったのか、近代日本の都市形成史を考える上でも、この部分を明らかにする必要があるだろう。そこで本稿では、京浜地域の浴場業を都市史研究の文脈に位置づけつつ、主に新潟県人の浴場業者に焦点を当てながら、戦前の都市移住者の一端を明らかにする。

そもそも戦前の状況が明らかでない背景には、聞き取り調査の方法的な限界だけでなく、史料的な制約も存在する。例えば、敗戦直後に上京し、浴場業に従事した星野剛や笠原五夫の自伝は知られているが[9]、浴場業者の出身地を示す体系的な史料はなく、また、移住者の出身地、定着地ともに世代交代が進んでいるため、史料を取り巻く環境は年々厳しくなっている。さらに浴場数の減少がそれに拍車をかけており、都市の衛生を担った浴場業の存在は縮小傾向にある。浴場業者の活動を残す上でも、戦前の状況を早急に解明する必要があるだろう。具体的には、戦前の新潟県人会名簿（以下、「県人会名簿」）を分析することで、可能な限り、浴場業者の出身地を再現する。その上で、浴場組合の名簿情報等を加えながら、浴場業者の活動を明らかにしていきたい。

1、京浜地域における浴場数の推移

最初に考察の前提として、京浜地域における浴場数の推移を確認しておこう。以前、筆者は『神奈川県統計書』の警察統計から横浜の浴場数の変化を分析し、四つの転換点があると指摘した[10]。すなわち、第一は1884（明治17）年の浴場営業規則制定前後、第二は1919（大正8）年の公設浴場設置前後、第三は1923年の関東大震災前後、第四は1937（昭和12）年の日中戦争前後である。いずれも比較的安定していた浴場数が外的要因によって危機的な状況を迎え、その数を減じている。例えば、1921年で385軒だった浴場数は1923年に203軒と激減、しかし1924年以降は京浜工業地帯の形成によって急激に数を伸ばし、1934年には495軒と500軒に迫る勢いだった。しかし、1940年は449軒と僅か6年で50軒近くが廃業した。災害や戦争が浴場業にも影響を及ぼしたのである。

さて、東京の浴場業の監督官庁は警視庁であった。それゆえ、1891年度から刊行が始まった『警視庁統計書』（初期は『警視庁事務成績』）には、府内の浴場数が警察署単位で記されている。同年度の解説「湯屋並行路営業」は、「湯屋ニ関スル取締ハ畢竟火災予防ニ外ナラス」としつつ、「亦風俗衛生並ニ浴客ノ安全等ニ関スル事項ナキニアラス」と、取締の目的を掲げた。その上で、「本年ニ於ケル湯屋営業者ハ千百三十九人ニシテ前年ニ比シ

二十一人ヲ減少セリ」としており、1891年12月末段階で、府内には1,139軒の浴場が存在した[11]。当時の東京府に西多摩、南多摩、北多摩の3郡は含まれず、人口は本籍と寄留を合わせて1,299,377人だった[12]。また、翌92年12月末段階の浴場数は1,123軒で、16軒減少している[13]。法規制の影響だと考えられるが、東京の浴場数は減少傾向にあった。

続いて【表Ⅰ】は神奈川県所属の多摩三郡が東京府へ移管された1893年以降の浴場数の推移である。1893年12月末段階の浴場数を確認すると、東京市（麹町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、浅草、本所、深川の各警察署管内）911軒、郡部（品川、新宿、板橋、千住、小松川の各警察署管内）202軒の合計1,113軒で、府域は拡大しつつも減少傾向は続いた。一方、全体の人口は1,550,218人（従来の東京府は1,317,535人、三郡は232,683人）と増加、この傾向は以後も継続していく[14]。翌年、郡部の浴場は増加したが、以降は市部、郡部ともに1900年まで減少、市部800軒台、郡部

【表Ⅰ】東京府における浴場数の推移

年	浴場			年	浴場				
	市部	郡部	総計		市部	新市部	郡部	島嶼	総計
1893年	911	202	**1113**	1918年	990	—	511	—	**1501**
1894年	897	291	**1188**	1919年	969	—	504	—	**1473**
1895年	882	260	**1142**	1920年	963	—	512	—	**1475**
1896年	873	257	**1130**	1921年	958	—	570	—	**1528**
1897年	851	257	**1108**	1922年	968	—	731	—	**1699**
1898年	813	242	**1055**	1923年	619	—	852	—	**1471**
1899年	817	213	**1030**	1924年	971	—	1025	—	**1996**
1900年	827	215	**1042**	1925年	996	—	1228	—	**2224**
1901年	826	236	**1062**	1926年	981	—	1356	—	**2337**
1902年	837	240	**1077**	1927年	1007	—	1443	—	**2450**
1903年	854	248	**1102**	1928年	969	—	1530	8	**2507**
1904年	861	251	**1112**	1929年	976	—	1645	11	**2632**
1905年	854	255	**1109**	1930年	977	—	1707	10	**2694**
1906年	854	270	**1124**	1931年	982	—	1762	8	**2752**
1907年	867	303	**1170**	1932年	987	1759	59	10	**2815**
1908年	879	338	**1217**	1933年	992	1823	57	8	**2880**
1909年	886	355	**1241**	1934年	994	1846	57	10	**2907**
1910年	881	369	**1250**	1935年	992	1845	57	10	**2904**
1911年	898	393	**1291**	1936年	997	1860	57	10	**2924**
1912年	939	435	**1374**	1937年	997	1871	51	9	**2928**
1913年	998	386	**1384**	1938年	982	1853	48	10	**2893**
1914年	997	488	**1485**	1939年	980	1803	51	9	**2843**
1915年	1000	481	**1481**	1940年	965	1736	52	7	**2760**
1916年	1024	504	**1528**	1941年	954	1763	55	7	**2779**
1917年	991	513	**1504**	1942年	950	1741	57	7	**2755**

※１：各年度の『警視庁統計書』より作成。
※２：1928年以降は「郡部」から「島嶼」が分離。

200軒台で推移する。しかし1901年以降は、微少な増減の波はあったが、全体的に増加傾向に転じ、大正時代を迎えた1912年には、市部939軒と900軒の大台を回復、また、郡部も435軒と400軒の大台に達した。この時点の人口は市部1,642,757人、郡部969,204人で、郡部の人口は市部の5分の3程度だった[15]。

浴場数の増加傾向はその後も続き、市部は1915年に1,000軒、さらに翌年には1,024軒と、統計上最も多い数となった。加えて、郡部も1916年に500軒の大台に乗った。こうした背景には、第一次世界大戦に伴う好景気や、それを支える労働人口の流入があったと推察できる。実際、1916年12月末段階で、市部の人口は1,822,560人、郡部の人口は1,166,743人となっていた[16]。しかしながら、翌年以降は減少に転じ、市部では1917年に33軒、1919年に21軒と大幅に減少、1922年までの4年間は950軒台後半から960軒台後半で停滞する。この背景には、人件費や物価の高騰、また、戦後不況の影響等があったと考えられる。ここで注目すべきは、市部の減少に対し、郡部の浴場数が伸びている点である。特に1921年は前年から約60軒、1922年は前年から160軒以上も増加、これは郊外部の都市化が始まったことを意味した。

それを踏まえた上で、1923年の数値を見ると、9月1日に発生した関東大震災が転換点になった。前年968軒だった市部の浴場は、震災によって激減、年末段階の営業数は619軒だった。しかし、翌年には971軒と震災前の水準を回復、以後、1937年頃まで970軒前後から1,000軒前後で増減を繰り返していく。この数値が市部の浴場数の限界点であった。一方、郡部への影響はほとんどなく、前年の731軒から852軒と増加している。ここで郡部と市部の数は逆転、1924年には1,000軒を超え、以後も急速に伸びていく。都市住民に入浴の機会を提供する公衆浴場を都市化の一つの指標とするならば、東京市と隣接する郡部（荏原郡、豊多摩郡、北豊島郡、南足立郡、南葛飾郡）の都市化が進んでいった。

市部、郡部ともに浴場数が1,000軒を超えた1927年の人口は市部1,907,692人、郡部2,775,001人で、郡部は市部の約1.5倍となっていた[17]。郊外部が発展した背景には、都心部と繋がる私鉄網の整備や、東京湾沿岸部の工業地帯化があった。この傾向は横浜市の郊外部に位置した橘樹郡の鶴見町や川崎町と共通している。その後、東京市は1932年10月に隣接5郡を市域に編入して「大東京」を実現、旧市部の浴場数は990軒台で停滞したものの、新市部の浴場数は1932年の1,759軒から1937年の1,871軒まで増え続けていった。1937年12月末段階の東京市の人口は6,155,651人で、旧市部の2,197,877人に対し、新市部は3,957,974人となっていた[18]。旧5郡の人口は増え続けたが、1938年以降は減少することになった。横浜と同様に、戦時体制が浴場業を圧迫していったと推察できる。

以上のように、東京の浴場業も横浜と同様の傾向にあった。古厩忠夫は浴場業の最盛期

を1939年～1940年頃の約2,800軒としていたが[19]、統計書を確認すると、東京市で2,800軒を超えたのは、1933年～1938年の5年間で、最も多かったのは、1937年の2,868軒だった。若干の誤差があったことがわかる。浴場数の推移を俯瞰して重要なのは、増減を繰り返しつつも、総体的な数が約1,100軒から約2,800軒に増えていった点である。当然ながら、浴場数の増加はその担い手を必要とし、北陸地方出身者の上京を促していった。

2、浴場労働者と経営者への道

民俗学者の岩本通弥は前田健太郎編『東西浴場物語』所収の「三助物語」を踏まえつつ[20]、東京都荒川区南千住汐入地区の調査を実施、後述する浴場労働請負業（部屋制度）について、「部屋は単に雇われる側の親睦・扶助の集団ではなく、忘れてならないのは、その同郷という閉鎖性・排他性によって、自らの生計手段・生活領域を自衛し、同郷以外からの侵犯を防ぐシステムであるとともに、雇用者側へ安定した労働力を供給する、生産の合理的なシステムであったことである」と、重要な指摘を行っている[21]。つまり、浴場業を担ったのは、特定の地域の出身者で、昭和20年代もほぼ同じ構造だった[22]。ここで問題としたいのは、このような構造がいつ頃形成されたのか、という点である。

管見の限り、その形成時期を検証できる史料は確認できていない。ただし、根拠は定かではないが、笠原五夫は近世以降の担い手の変化を「うま味の薄くなった銭湯は、金銭に目ざとい関西の主な経営者から裏方であった湯屋番に譲渡され、北陸人が銭湯の表舞台に登場することとなった。北陸人の実直な人間関係と勤勉さによって、銭湯は生き残り、銭湯界に北陸出身者が多数を占める現在の下地が出来上がった」と説いている[23]。ここから明治期に北陸地方出身者の地盤が固まったと推察できる。また、1903年12月の雑誌『東京』に掲載された「湯屋営業と其湯銭とに就て」は、「湯屋者の店卸しを為やうが、彼等は重もに能登、越中、越後出である」とし、「国に居て誰れがしが江戸で威勢が善い、何か世話して貰はうと、エッチラ越後を出て来る。知らない稼業よりは慣れたものと頼る人の命令、何で背き得らりやうかで三助修行となるのだ」と、上京した成功者が同郷者を呼び寄せる連鎖移住の構造を指摘している[24]。つまり、少なくとも明治30年代、日露戦争前には、北陸地方出身者が浴場業界で働く道筋ができていた。

続いて「三助物語」や先行研究を踏まえながら、明治期の連鎖移住と浴場業界の構造を整理してみよう[25]。まず、人脈を頼りに北陸地方から上京した若い男性は、子分として地縁・血縁の経営者（親分）の下に入ると、「小僧」（見習い）として燃料収集や下足番を二、三年やった後、「仲」（中番頭）として釜焚きや流し（客の先身・マッサージ）の修行

を行い、それを二、三年経験して技術が上達すると一人前の職人、「三助」となる。これは昭和初期の事例だが、「湯屋営業と其湯銭とに就て」は、「今日の様に螺線一ツ廻はせば水が来るのでは無い。手に豆が出来、足に胼を入れて夫れこそ車井から彼是れ二斗五升入位の水を吸み込むのだ。一升飯は彼等の常食だが、無理もない。其側らには鉋屑やら木拾ひやらで其修行が積んで釜前となり、始めて一人前の三助と云ふ資格が出来、客の流しをする様になるのだ」としており、明治期の構造も同様であった[26]。さらに数年後には運営を取り仕切る「番頭」に昇格、若い女性の「女中」を含めた従業員を動かしていく。

しかしながら、浴場労働者の仕事は過酷であった。1909年7月の雑誌『商業界』に掲載された「湯屋の三助は何うして金を残すか」において三助某は次のように述べている[27]。

> 一体湯屋の三助と云ふ役は楽の仕事ではありません。此の節は、大抵の湯屋に水道が使はれるやうになって、大きに水の酌み込みは楽になりましたが、それにしても朝の暗い中から、真夜中過ぎまで、素裸で働いて居るのですから容易ぢゃ無い。御案内の通り、夜の十一時過ぎから、力ら一杯ざくろぐちから湯槽を洗ひ始めますが、客の都合で全く湯を落とすのは十二時過ぎになって仕舞ふ。それから翌朝沸かす湯の水を張り込んで、寝に就くのが二時頃になります。寝ると云ったところで、他の奉公人のやうに、纏って寝道具の上に寝るのぢゃない。湯を蓄へて置く湯槽へ転りと横になれば、下から上る湯の温気で、冬も寒い事は無く、終日の疲れで其の丶夢に入って仕舞ひます。而して午前四時となれば、早飛び起きて朝湯の仕度にか丶らねばなりません。

そうした状況ゆえ、給与を使う時間はなく、自然と貯金ができる。この段階になると、子飼いの場合、親分が血縁や地縁、また、同業者の人脈から嫁を世話するほか、独立にむけた支援も行うようになる。

一方、三助になると、高い給与を求め、「部屋」と呼ばれる浴場労働請負業者のもとへ移る者も多く、そこでいくつかの浴場を渡り歩くことが経営者への近道でもあった。請負業者は寄親（親分）として寄子（子分）の三助を多く抱えるとともに、得意先の浴場で人手が不足した場合は労働力の提供を行った。先の岩本の指摘にあるように、このシステムは北陸地方出身者が独占しており、明治末期も状況は変わらなかった[28]。例えば、苦心の末、「部屋」の潜入取材を行ったジャーナリストの知久泰盛は、「湯屋の傭人を周旋するのは普通の桂庵〔周旋業者―引用者注〕ではなく、別にこれを専業にしてゐる者があって、湯屋の雇人を称して「寄子」と云ひ、これが周旋人を親分と称し、親分の家を「寄子部屋」といって、土方の土方部屋に於ける如く、寄子部屋にはその寄子なるものが大勢ゐて、親分の手によって、彼等は各浴場に入り込むのださうだ」と、制度の構造を解説している[29]。また、潜入した「部屋」で「寄子生国姓名帳といふのがあったので、竊とこれを見るとそ

の八分通りは越前、越中、越後、能登といふのだ。後ちに聞くと寄子仲間では、この四ケ国以外の者を場違ひといってゐるので、この四ケ国は三助の名産地なのであった」と記しており、浴場に派遣される際も知久は「バチの国」出身者と紹介された。ここから北陸地方出身者が浴場労働を独占していた様子が窺える。

そうした複数の道筋を経て経営者になると、最初は親分の影響下にある借家浴場（預り株）から経営をはじめ、自らの子分として地縁・血縁から従業員を集める。既述の「湯屋営業と其湯銭とに就て」は、「辛抱の善いものは二三年も働くと三四百円も出来る。夫れを資本に「預り株」とて持主へ其金を敷に入れ一ヶ月揚り幾何と一戸を構へて彼等の所謂親方になるのだ」と経営者への道筋を説く(30)。そして、それが成功して資金できると、次は自家浴場（自分株）を購入、さらに経営規模を拡大させて複数の浴場経営をめざした。ここで子分を新たな経営者として独立させ、傘下のグループを形成、また、自らも組合の役員を務めるなど、業界内で存在感を示していくのである。

このような成功者がいる一方で、「辛抱の悪るいと来ては論外で五十面下げて三助して居るものがある」と挫折する者もいた(31)。昭和初期の「三助物語」も「一番儲けるのは二十五六で、三十迄に独立しない者は一生涯世帯は持てませんね。三助も三十過ぎては駄目です。四十、五十となった連中は、市内の忙しい仕事は出来なくなって、だんだん郡部の閑な町へ廻るのです」と、その最後を示している(32)。当然だが、北陸地方から上京したすべての若者が成功したわけではなかった。

3、浴場業者の出身地

これまで整理してきたように、明治期を通じて、北陸地方出身者が京浜地域の浴場業を独占していった。ここで浴場業者は新潟県、富山県、石川県の三県出身者が多いとされるが、そのなかでも地域的な偏重があった。例えば、笠原五夫は東京の浴場業者の出身地として、新潟県の西蒲原郡と魚沼郡、富山県の上市町、高岡市、氷見市、小矢部市、石川県の能登方面及び加賀方面と、具体的な地域を挙げている(33)。おそらく自らの経験と独自の調査から言及したのだろう。また、谷口貢は1960（昭和35）年11月刊行の『東京新潟県人会名簿』を分析し、96人の浴場業者の出身地を明らかにするとともに、燕市を含む西蒲原郡出身者が全体の約72％を占める点を浮き彫りにした(34)。ただし、これらは戦後の状況で、戦前の状況は判然としない。そこで谷口の手法に学びつつ、戦前の県人会名簿から出身地域の分析を試みたい。

管見の限り、戦前の名簿については、新潟県立図書館に以下の7点が所蔵されている。

A：小柳市造編『大正五年 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1916年）

B：小柳市造編『大正六年九月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1917年）

C：齋藤廣蔵編『大正八年十一月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1919年）

D：齋藤廣蔵編『大正十年十一月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1921年）

E：新潟県人親睦会事務所編『大正十三年十二月現在 新潟県人親睦会々員名簿』（新潟県人親睦会事務所、1924年）

F：遠藤謹吾編『大正十五年度版 新潟県人々員名簿』（新潟県人会、1925年）

G：高橋竹治編『昭和五年五月現在 最新全国新潟県人会々員名簿』（三栄舎、1930年）

このうちA～D、Fは東京の県人会名簿、Eは横浜の県人会名簿で、Gは東京や横浜だけでなく、植民地を含めた各地の県人会名簿となっている。各県人名簿は会員の出身地（郡市町村単位）や現住所、職業等の情報を記しており、それらを複数の名簿から体系的に見ることで、人々の動きを明らかにすることができる。また、すべての出郷者が県人会に加

【表Ⅱ】浴場業者の出身地域

郡	人数	町村	人数	昭和の合併	現在
西蒲原郡	245	中野小屋村	1	新潟市	新潟市西区
		巻町	6	巻町	新潟市西蒲区
		漆山村	45	巻町	新潟市西蒲区
		四ツ合村	2	潟東村	新潟市西蒲区
		大原村	10	潟東村	新潟市西蒲区
		月潟村	2	月潟村	新潟市南区
		小吉村	12	中之口村	新潟市西蒲区
		道上村	36	中之口村	新潟市西蒲区
		松長村	53	燕市	燕市
		燕町	14	燕市	燕市
		太田村	4	燕市	燕市
		小中川村	16	燕市	燕市
		吉田町	10	吉田町	燕市
		米納津村	19	吉田町	燕市
		粟生津村	1	吉田町	燕市
		和納村	1	岩室村	新潟市西蒲区
		間瀬村	2	岩室村	新潟市西蒲区
		弥彦村	1	弥彦村	弥彦村
		地蔵堂町	1	分水町	燕市
		国上村	4	分水町	燕市
		不明	5	―	―
中蒲原郡	6	白根町	2	白根市	新潟市南区
		茨曽根村	2	白根市	新潟市南区
		臼井村	1	白根市	新潟市南区
		亀田村	1	亀田町	新潟市江南区
南蒲原郡	3	三条町	2	三条市	三条市
		本城寺村	1	三条市	三条市
三島郡	3	大河津村	3	寺泊町・与板町	長岡市
刈羽郡	5	柏崎町	1	柏崎市	柏崎市
		中鯖石村	1	柏崎市	柏崎市
		横澤村	2	小国町	長岡市
		鵜川村	1	黒姫村	柏崎市

郡	人数	町村	人数	昭和の合併	現在
古志郡	25	上組村	3	長岡市	長岡市
		山通村	15	長岡市	長岡市
		中通村	1	長岡市	長岡市
		栖吉村	1	長岡市	長岡市
		竹澤村	1	山古志村	長岡市
		太田村	4	山古志村	長岡市
北魚沼郡	7	小出町	1	小出町	魚沼市
		田麦山村	1	川口町	長岡市
		薄生村	1	小千谷市	小千谷市
		田川入村	1	堀之内町	魚沼市
		山辺村	3	小千谷市	小千谷市
中魚沼郡	2	中条村	1	十日町市	十日町市
		下条村	1	十日町市	十日町市
南魚沼郡	2	六日町	1	六日町	南魚沼市
		薮神村	1	大和村	南魚沼市
東頸城郡	2	牧村	1	牧村	上越市
		松之山村	1	松之山町	十日町市
高田市	2	―	2	上越市	上越市
中頸城郡	5	直江津町	1	上越市	上越市
		中郷村	1	中郷村	上越市
		関山村	1	妙高村	新井市
		潟町村	1	大潟町	上越市
		下黒川村	1	柿崎町	上越市
西頸城郡	5	大和川村	1	糸魚川市	糸魚川市
		下早川村	2	糸魚川市	糸魚川市
		青海村	1	青海町	糸魚川市
		浦本村	1	糸魚川市	糸魚川市
不明	7	―	7	―	―
合計319人					

※1：小柳市造編『大正五年 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1916年）、小柳市造編『大正六年九月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1917年）、齋藤廣蔵編『大正八年十一月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1919年）、齋藤廣蔵編『大正十年十一月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1921年）、新潟県人親睦会事務所編『大正十三年十二月現在 新潟県人親睦会々員名簿』（新潟県人親睦会事務所、1924年）、遠藤謹吾編『大正十五年度版 新潟県人々員名簿』（新潟県人会、1925年）、高橋竹治編『昭和五年五月現在 最新全国新潟県人会々員名簿』（三栄舎、1930年）より作成。

※2：自治体の変遷については平凡社地方資料センター編『日本歴史地名体系第15巻 新潟県の地名』（平凡社、1986年）、竹内理三編『角川日本地名大辞典15 新潟県』（角川書店、1989年）を参照。

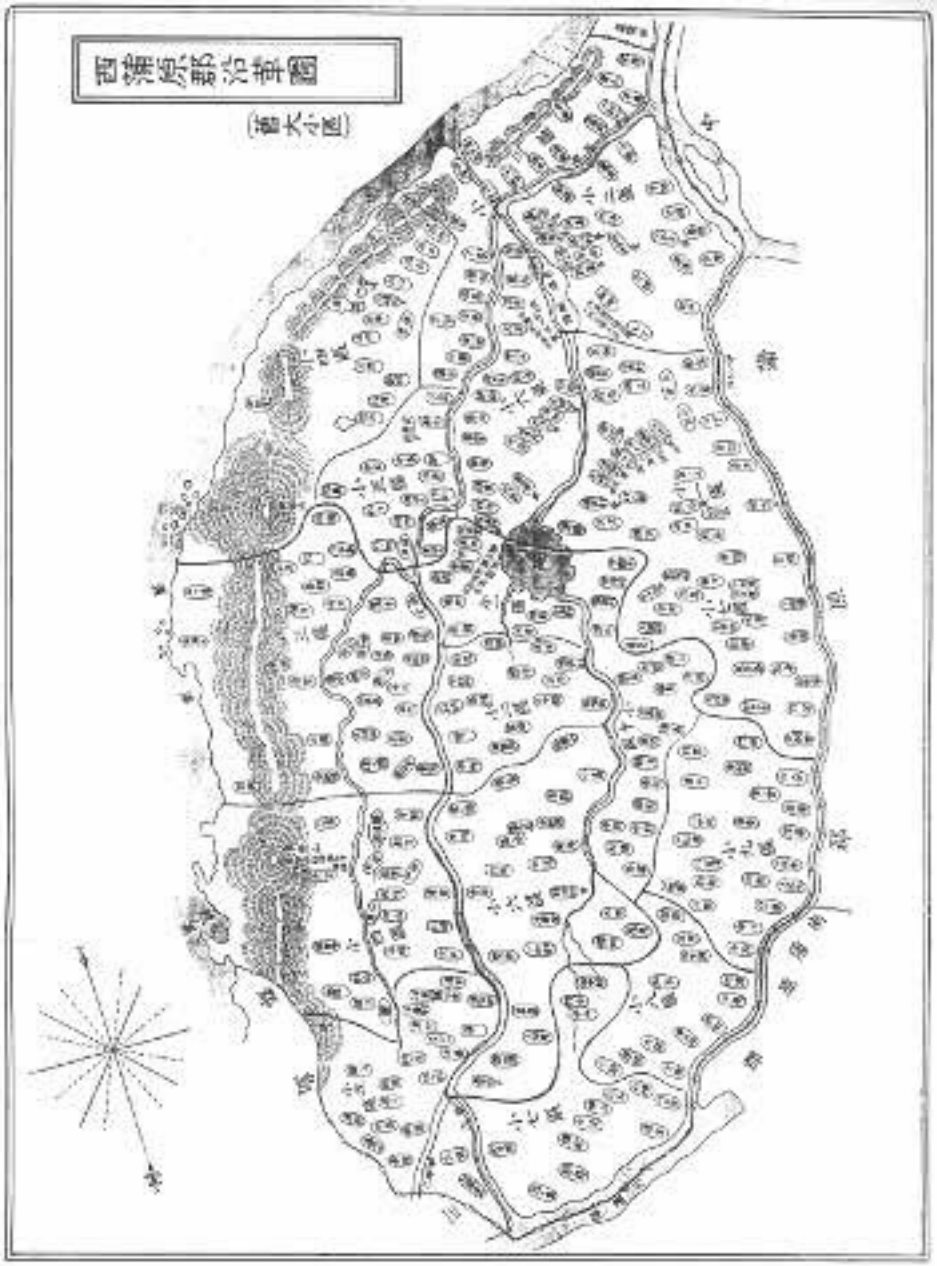
※3：「昭和の合併」は1953年（昭和28年）の町村合併促進法以降から昭和末までの自治体名を記した。

入しているわけではないが、出身地の傾向を掴むことは可能である。

上記の7点から東京と横浜、さらに横須賀の浴場関係者（従業員請負業、湯花商を含む）を抽出すると、重複等を除いて319人の存在を確認することができた。詳細は後述の【表Ⅲ】にまとめるが、319人の出身地を郡別、町村別に整理すると【表Ⅱ】のようになる。郡別で見ると、戦後と同様に、西蒲原郡が圧倒的に多く、245人と全体の約77％を占めている。次いで多いのが古志郡（現・長岡市）の25人（約8%）、以下、北魚沼郡7人、中蒲原郡6人、刈羽郡・中頸城郡・西頸城郡が各5人と続く。特徴的なのは、県域全体でみると、中越・上越の各郡では最低1人の出身者がいるのに対し、下越の阿賀野川以北、すなわち東蒲原郡や北蒲原郡、岩船郡の出身者は確認できない。また、これは海を隔てた佐渡郡（佐渡島）も同じである。一方、西蒲原郡を囲む中蒲原郡、南蒲原郡、三島郡の浴場業者の出身地を確認すると、白根町（現・新潟市南区）、茨曽根村（同）、三条町（現・三条市）、大河津村（現・長岡市）など大部分が西蒲原郡の村々と隣接、西蒲原郡の浴場業者の人脈が郡域を越えて影響したと推察できる。そうした点から戦前、戦後を通じて、西蒲原郡が新潟県における浴場業者輩出の中心地だったことがわかる。

次に町村別の状況から西蒲原郡内の地域的な傾向を確認してみよう。西蒲原郡で最も多くの人材を輩出していたのは松長村（現･新潟市西蒲区及び燕市、主な集落は松橋、長所、長渡、舘野、羽黒、姥島、真木など）の53人（西蒲原郡全体の約22%）で、全国浴場組合の会長を務めた赤塚五郎（羽黒）や田村虎太郎（姥島）は同村の出身者であった(35)。次いで多いのが漆山村（現・西蒲区、主な集落は漆山、山島、柿島、河井、赤鎗、潟頭、桜林、馬堀、並木など）の45人（同約18%）、その次が道上村（同、主な集落は道上、打越、牧ケ島、福島、河間、三ツ門）の36人（同約15%）で、打越からは戦後に全国公衆浴場環境衛生同業組合の理事長となった栃倉晴二が出ている(36)。つまり、松長村、漆山村、道上村の三村で西蒲原郡出身者の半数を占め、浴場業界を先導する人物も輩出していた。また、次に多いのは米納津村（現・燕市、主な集落は米納津、庚塚、雀森、佐渡山、西槇など）の19人で、ここは新潟県人の浴場業者の元祖とされる伊藤赤太郎の出身地であった(37)。以下、小中川村（現・燕市）16人、燕町（同）14人、小吉村（現・西蒲区）12人、大原村（同）と吉田町（現・燕市）がそれぞれ10人と続いている。

これらの村々の配置を【図Ⅰ】から確認すると、信濃川支流の中ノ口川左岸から鎧潟以南に集中している。この地域では、水田間に路村型の集落が点在、それぞれが村道によって結ばれていた。特に鎧潟以南の集落から郡行政の中心地である巻町（現・西蒲区）へと繋がる漆山村は、周辺集落の経済的な中心地で、村道の両側に商店や料理屋が軒を連ねていた。また、松長村、漆山村、道上村の三村は打越を結節点として繋がっており、地理的



【図Ⅰ】「西蒲原郡沿革図」（小島太郎一編『西蒲原郡志』新潟県西蒲原郡教育会、1907年、千秋社2000年復刻版より引用）

に打越が京浜地域の浴場業者を輩出する上で、重要な役割を果たしていたと推察できる。こうした地域の構造のなかで、集落間の人的交流が盛んに行われ、そこから浴場経営者をめざす若者が上京していったと考えられる。

他方、同じ西蒲原郡でも鎧潟以北の出身者はほとんどなく、唯一、中野小屋村（現・新潟市西区）出身者が1人いるのみである。また、弥彦山脈（国上山、弥彦山、角田山）の麓や日本海側に沿った集落も少なく、水田が広がる平野部ほど多い傾向にあった。実際、300以上の集落から構成される西蒲原郡のどこが最も多くの人材を輩出しているか判然としないが、松長村、漆山村、道上村の三つを中心地域とするならば、そこから距離が遠のくほど浴場業者は減っており、北端は中野小屋村、西端は日本海に面する漁村の間瀬（現・西蒲区）、南端は大河津分水右岸の地蔵堂町及び国上村（現・燕市）となっている[38]。

以上のように、戦後と同様に、西蒲原郡が浴場業者を最も多く輩出する地域だった。さらにその中でも隣接する松長村、漆山村、道上村が中心地だったことがわかる。この地域の若者たち、特に農家の次男や三男、また、嫁入り前の若い女性たちは同郷の成功者を頼って上京、浴場業界に身を委ねていったのである。

4、新潟県人の浴場経営

数年分の県人会名簿から浴場業者の出身地と、名簿記載時の居住地は判明したが、浴場の屋号等については記載が一部しかないため、上京者がどこでどのような浴場を営んでいたか明らかでない。その穴を埋めるのが各浴場組合発行の組合員名簿（以下、「浴場組合名簿」）である。これを県人会名簿と併せて分析することで、屋号だけでなく、業者の移動や人脈等も窺い知ることができる。また、浴場組合名簿からは東京浴場組合や神奈川浴場組合の幹部、規則、さらに地区単位組合の代表者や定例会、集会場所等がわかる。

管見の限り、東京市及び神奈川県の浴場名簿については以下の6点が確認でき、それを年代順に並べると次のようになる。

a：前田健太郎編『昭和四年三月調査 六大都市府県下浴場名鑑』（浴場新聞社、1929年）

b：長崎驥編『昭和六年四月現在 東京浴場名簿』（東京浴場新聞社、1931年）

c：長崎驥編『昭和九年二月現在 東京浴場名簿』（東京浴場新聞社、1934年）

d：長崎驥編『昭和十年二月現在 東京浴場名簿』（東京浴場新聞社、1935年）

e：神奈川県浴場組合連合会編『昭和十二年二月現在調 神奈川県浴場組合連合会浴場名簿』（神奈川県浴場組合連合会、1937年）

f：神奈川県浴場組合連合会編『昭和十七年二月現在調 神奈川県浴場組合連合会浴場

名簿』（神奈川県浴場組合連合会、1942年）

上記のうちａとｅは横浜市中央図書館所蔵、b～dは東京都立中央図書館所蔵、fは横浜市史資料室所蔵の史料で、それぞれ表題の通り、東京市と神奈川県の浴場組合名簿だが、aはそれらに加え、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県の浴場組合名簿も収めている。これらの名簿と県人会名簿の情報を照合すると、新潟県人の経営する浴場が浮かび上がってくる。それぞれ重なる年はないが、県人会名簿で最も新しい1930（昭和5）年（G）と、その前後の29年（a）と31年（b）の浴場組合名簿を中心に情報を整理したのが【表Ⅲ】である。ここから319人の基礎情報を確認することができた。なお、c～fの情報を加えると、町名変更等が多く、図表が煩雑となるため、その検討は今後の課題とし、本稿では各業者の個別事例について適宜参照するにとどめた。また、東京都立中央図書館には1937年と1938年の東京浴場信用組合の名簿も存在するが、すべての浴場が記載されているわけではないので、そちらの分析も今回は省くこととした[39]。

既述の通り、上京者のすべてが県人会に加入したわけでなく、例えば、日露戦争時に上京した赤塚五郎は、1921（大正10）年以前の名簿では確認できない。その点を踏まえ、県人会名簿を確認すると、1916年段階から県人会に所属し、かつ昭和期の浴場名簿で確認できる人物として（19）石井平吉、（65）金子栄次郎、（82）久住辰治郎、（128）佐藤鯨三郎、（150）杉山傳平の5人が確認できる。また、（3）青柳忠太郎や（44）大倉竹蔵も1917年段階から県人会に加入しており、昭和期の浴場組合名簿にも記載されている。これらの人物はいずれもグループを形成した親分と考えられ、久住と青柳は（49）大屋栄七の後任として池袋浴場組合の組合長を務めたほか[40]、杉山も日本堤浴場組合の組合長を務めていた。この7人の出身地を見ると、石井、金子、杉山、青柳、大倉の5人は西蒲原郡、久住と佐藤はそれに隣接する三島郡大河津村と南蒲原郡三条町であった。加えて池袋の大屋も杉山と同じ大原村出身で、西蒲原郡出身者が地区単位組合を先導していた。

次に【表Ⅲ】から血縁に基づく浴場の継承例が確認できる。例えば、（1）青木吉太郎と青木三郎〔大原湯〕、（44）大倉竹蔵と大倉喜三郎〔清水湯〕、（52）小川周吉と小川龍徳〔菊の湯〕、（58）籠島セキと籠島又次郎〔和倉湯〕、（93）小島龍吉と小島亀太郎〔紅葉湯〕、（128）佐藤鯨三郎と（132）佐藤庄一郎〔栄湯〕、（133）佐藤豊蔵と（130）佐藤健造及び佐藤トシ〔弘法湯〕、（168）田原ヤウと田原寅三郎〔高砂湯〕、（199）頓所富八と頓所ミサ〔宮仲湯〕、（203）永井啓之と永井豊平〔ニコニコ湯〕、（210）中山勝治と中山寅蔵〔草津湯〕、（214）成田きくと成田ヤソ〔竹の湯〕、（243）平岡信之助と平岡スイ〔紅葉湯〕、（251）深澤珍平と深澤乙八〔真島湯〕、（261）星野富治と星野隆次〔武蔵湯〕、（275）丸山金松と（276）丸山儀松〔梅の湯〕、（286）村山猪太郎と（288）村山繁松及び村山ツネ〔港湯〕、（297）

【表Ⅲ】新潟県出身の浴場業者

番号	検索	氏名	出身地			居住地			浴場屋号	出典		備考
			郡市	町村	集落	郡市	区町	町/番地		県人名簿	浴場名簿	
1	あ	青木吉太郎	西蒲原郡	道上村	—	北豊島郡	西巣鴨町	池袋大原1371	—	F	—	aの経営者は青木三郎(大原湯)、bの経営者は本谷孫四郎(大原湯)
2	あ	青柳佐徳	西蒲原郡	米納津村	—	北豊島郡	巣鴨町	宮仲2507	斉藤湯	G	a	aの住所は西巣鴨町巣鴨2507、bの経営者は井藤嘉一郎(斎藤湯)
3	あ	青柳忠太郎	西蒲原郡	松長村	—	北豊島郡	巣鴨町	宮仲2454	—	BCD	—	abの経営者は岩野藤蔵(月見湯)
						北豊島郡	巣鴨町	堀ノ内65	松の湯	FG	ab	aの住所は西巣鴨町堀ノ内65
4	あ	相田吉太郎	西蒲原郡	米納津村	—	豊多摩郡	淀橋町	柏木153	松の湯	G	b	aの経営者は曽我茂助(松の湯)
5	あ	相場直蔵	西蒲原郡	漆山村	—	荏原郡	大井町	北浜川5422	萩の湯	F	a	aの住所は大井町5422、bの経営者は小林三郎(萩の湯)
6	あ	赤塚五郎	西蒲原郡	松長村	羽黒	東京市	神田区	三崎町3-1	三崎湯	FG	a	bの経営者は赤塚タカ子(三崎湯)
7	あ	赤塚隆太郎	西蒲原郡	松長村	—	東京市	麻布区	新広尾町3-90	末広湯	F	ab	
8	あ	朝妻久平	西蒲原郡	松長村	—	東京市	小石川区	林町70	—	F	—	aの経営者は小林三作(朝日湯)、bの経営者は小林三郎(朝日湯)
9	あ	淺野熊治	西蒲原郡	道上村	—	東京市	本所区	長崎町3	—	ABCD	—	aの経営者は松井利三郎(松栄湯)、bの経営者は松井コト(松栄湯)
						東京市	牛込区	白銀町2	—	F	—	abの経営者は米山左和二(妙法湯)
						荏原郡	入新井町	不入斗823	桜湯	—	ab	
10	あ	荒木市太郎	西蒲原郡	道上村	—	南葛飾郡	寺島町	寺島542	弘法湯	G	ab	
11	あ	有波三八	西蒲原郡	—	—	横浜市	中区	藤棚町120	第一進盛館	G	a	
12	あ	有波寅三郎	西蒲原郡	小中川村	—	横浜市	中区	久保町105	第三進盛館	—	a	
						横浜市	中区	久保町413	第二進盛館	E	a	
13	い	飯塚純次	西蒲原郡	松長村	—	東京市	本郷区	真砂町10	真砂湯	G	ab	Gの氏名は飯坂純治
14	い	五十嵐於喜	西蒲原郡	道上村	—	南足立郡	千住町	牛田3-378	大吉湯	G	a	aの住所は千住町3-378、bの経営者は神保仁太夫(大吉湯)
15	い	五十嵐徳松	古志郡	太田村	—	荏原郡	碑衾町	碑文谷565	第三富士の湯	G	a	bの経営者は太田定治(第三富士の湯)
16	い	碇寅平	西蒲原郡	大原村	—	南葛飾郡	隅田町	善左衛門354	碇湯	G	ab	aの住所は隅田町354
17	い	井口覚一	北魚沼郡	小出町	—	北豊島郡	西巣鴨町	堀之内137	日の出湯	F	a	bの経営者は小宮嘉右衛門(日の出湯)
18	い	池田熊次郎	西蒲原郡	松長村	—	東京市	四谷区	須賀町13	梅の湯	G	ab	
19	い	石井平吉	西蒲原郡	松長村	—	東京市	牛込区	西五軒町25	光明泉	ABCDF	ab	bの屋号は光明軒
20	い	石田作次郎	中頸城郡	直江津町	片原町	東京市	深川区	西平井町15	五色湯	CD	—	aの経営者は梅田岩吉(松の湯)
21	い	石田仁平治	西蒲原郡	漆山村	—	南足立郡	西新井町	新道438	不動湯	G	ab	aの氏名は仁平、住所は大字本木428
22	い	石田平吉	西蒲原郡	小中川村	—	荏原郡	碑衾町	碑文谷115	第一梅の湯	G	a	aの氏名は平治、bの経営者は藤本保(第一梅の湯)
23	い	磯野光司	西頸城郡	大和川村	—	北豊島郡	高田町	大原1535	—	G	—	abの経営者は磯野與吉(御園湯)
24	い	伊藤赤太郎	西蒲原郡	燕町	—	東京市	京橋区	新富町4-9	—	AB	—	aの経営者は山本九二(新富湯)、bの経営者は伊藤富貴(新富湯)
25	い	伊藤介三郎	西蒲原郡	漆山村	馬堀	東京市	浅草区	千束町1-1	千歳湯	AB	—	abの経営者は鶴巻久太郎(千歳湯)
26	い	伊藤勝蔵	西蒲原郡	漆山村	馬堀	東京市	牛込区	横寺町13	捷泉湯	F	ab	
27	い	伊藤清松	古志郡	山通村	—	東京市	芝区	新門町8	櫻湯	G	ab	
28	い	伊藤金蔵	西蒲原郡	燕町	—	東京市	日本橋区	久松町24	—	AB	—	aの経営者は上地作太郎(有楽湯)
29	い	伊藤慶四郎	西蒲原郡	小吉村	—	北豊島郡	西巣鴨町	池袋224	小松湯	G	ab	aの住所は池袋223
30	い	伊藤宗平	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	浅草区	新吉原京町2-39	黒助湯	G	ab	aの氏名は惣平、Gの番地は2-35
31	い	稲吉定吉	西蒲原郡	米納津村	—	南葛飾郡	小松川町	2-99	小松湯	F	a	bの経営者は江原半五郎(小松湯)
32	い	井上條太	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	深川区	八名川町4	—	CD	—	aの経営者は小原親治(松の湯)
						東京市	浅草区	千束町3-129	菊の湯	G	ab	Gの氏名は粂太、aの屋号は葉の湯
33	い	井ノ口忠平	西蒲原郡	米納津村	—	荏原郡	目黒町	下目黒677	瀧の湯	G	a	aの氏名は井口、bの経営者は平澤秀次(瀧の湯)
34	い	猪股忠太郎	西蒲原郡	道上村	—	北豊島郡	三河島町	三河島1148	恵比寿湯	G	ab	
35	い	岩本千代吉	西蒲原郡	巻町	—	東京市	本郷区	弥生町3	弥生湯	G	a	bの経営者は渡邊三治(弥生湯)

36	う	氏田松太郎	西蒲原郡	地蔵堂村	—	東京市	浅草区	森田町18	和倉湯	G	—	aの経営者は飯田徳次郎(和倉湯)、bの経営者は荒井寛治(和倉湯)
37	う	梅澤樽次	中頸城郡	中郷村	—	東京市	浅草区	馬道町8-5	隅田川湯	FG	ab	Gの氏名は樽治
38	う	内山謙蔵	西蒲原郡	道上村	—	東京市	四谷区	塩町3-18	大木戸湯	G	ab	Gの氏名は鎌蔵
39	う	内山忠蔵	西蒲原郡	道上村	—	北豊島郡	王子町	下十条625	地蔵湯	G	ab	Gの住所は下十条622
40	う	梅原粂治	刈羽郡	中鯖石村	—	豊多摩郡	代々幡町	代々木579	梅の湯	G	ab	Gの氏名は久米治、住所は代々幡町初台576
41	え	江邊金吉	西蒲原郡	太田村	—	東京市	浅草区	瓦町13	田丸湯	G	ab	
42	え	遠藤寅平	西蒲原郡	小中川村	—	北豊島郡	板橋町	下板橋2078	—	F	—	aの経営者は水野貞雄(福の湯)、bの経営者は木野貞雄(福の湯)
43	お	大久保惣蔵	中頸城郡	関山村	—	南葛飾郡	寺島町	寺島2521	第四香藤湯	G	ab	bの氏名は宗三
44	お	大倉竹蔵	西蒲原郡	弥彦村	村山	豊多摩郡	千駄ヶ谷町	原宿159	—	BCDFG	—	Gの氏名は竹蔵、abの経営者は大倉喜三郎(清水湯)
45	お	大関万次郎	西蒲原郡	—	—	東京市	麻布区	北日ケ窪町36	快楽湯	G	ab	
46	お	大関力知	西蒲原郡	和納村	—	豊多摩郡	大久保町	西大久保54	梅の湯	G	ab	
47	お	大谷林吾	西蒲原郡	四ツ合村	横戸	東京市	牛込区	通寺町46	—	F	—	abの経営者は法橋與四松(朝日湯)
48	お	大野留三郎	中蒲原郡	亀田村	—	横浜市	神奈川区	浦島丘1440	隆盛館	G	a	aの住所は神奈川町1440
49	お	大屋栄七	西蒲原郡	大原村	—	北豊島郡	西巣鴨町	池袋831	大黒湯	DFG	a	aの住所は池袋828、bの経営者は早福惣吉(大黒湯)
						北豊島郡	下練馬町	各戸7041	大黒湯	—	a	bの経営者は富澤寅蔵(大黒湯)
50	お	岡崎勝蔵	—	—	—	東京市	神田区	三崎町3-1	—	A	—	aの経営者は赤塚五郎(三崎湯)
51	お	岡宇一郎	西蒲原郡	小吉村	—	北豊島郡	瀧野川町	西ヶ原694	稲の湯	G	ab	Gの氏名は守一郎
52	お	小川周作	中魚沼郡	中条村	尾崎	北豊島郡	瀧野川町	上中里155	—	CDF	—	aの経営者は小川龍徳(菊の湯)、bの経営者は坂本幸次郎(菊の湯)
53	お	小川順三郎	西蒲原郡	燕町	—	東京市	小石川区	久堅町84	旭湯	G	ab	
54	お	小熊瀬松	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	浅草区	今戸町79	今戸温泉	G	ab	Gの氏名は頼松、bの住所は今戸町82
55	お	小澤源吾	西蒲原郡	小中川村	—	北豊島郡	尾久町	上尾久253	第二櫻湯	FG	ab	aの住所は上尾久2053
56	お	長田鉄治郎	南魚沼郡	六日町	—	荏原郡	大崎町	上大崎149	三島湯	G	ab	aの氏名は鉄次郎、bの住所は上大崎56
57	お	小野塚勇吉	西蒲原郡	松長村	姥島	東京市	牛込区	馬場下町214	—	F	—	
						東京市	浅草区	猿若町3-4	和倉湯	G	ab	
58	か	籠島セキ	西蒲原郡	米納津村	佐渡山	横須賀市	佐野町	6	和倉湯	G	—	aの経営者は籠島又次郎(和倉湯)
59	か	笠原平作	西蒲原郡	太田村	—	北豊島郡	西巣鴨町	折戸932	豊島湯	F	ab	abの住所は西巣鴨町巣鴨932
60	か	風間金太郎	高田市	—	—	東京市	浅草区	三間町35	富士の湯	G	ab	abの氏名は風間金次郎
61	か	風間惣平	中蒲原郡	臼井村	—	東京市	京橋区	南小田原町2-7	入船湯	G	ab	
62	か	片山虎蔵	西頸城郡	下早川村	—	東京市	浅草区	田町1-13	鶴の湯	FG	ab	abの氏名は虎蔵、Gの番地は1-11
63	か	片山與之吉	西頸城郡	下早川村	—	東京市	本所区	石原町41	—	ABC	—	abの経営者は酒井庄吉(弁天湯)
64	か	加藤助松	西蒲原郡	米納津村	—	北豊島郡	下板橋	土合2002	越の湯	G	ab	aの住所は下板橋町2002
65	か	金子栄次郎	西蒲原郡	松長村	舘野	荏原郡	品川町	南品川宿216	れんが湯	ABCDF	ab	aの住所は南馬場2-216、bの住所は漁師町2-216
66	か	金子清作	西蒲原郡	国上村	—	北豊島郡	巣鴨町	宮仲1923	大正湯	F	—	aの経営者は如澤仁太郎(昭和湯)、bの経営者は照田忠雄(喜楽湯)
67	か	金子正太郎	西蒲原郡	巻町	—	北豊島郡	高田町	雑司ケ谷水久保175	—	G	—	aの経営者は金子甚太郎(第一小金湯)、bの経営者は小林タマエ(小金湯)
68	か	金子治平	西蒲原郡	太田村	—	北豊島郡	西巣鴨町	向原2899	朝日湯	FG	ab	
69	か	金子仁三郎	西蒲原郡	道上村	—	東京市	深川区	富岡明神前町58	—	CD	—	Cの氏名は二三郎、abの経営者は田村曾一郎(旭湯)
						東京市	深川区	洲崎弁天町1-3	—	F	—	
70	か	金子與三郎	西蒲原郡	大原村	—	豊多摩郡	渋谷町	大和田77	金泉湯	G	ab	
71	か	金永郁次郎	西蒲原郡	大原村	—	東京市	深川区	東元町18	大黒湯	G	ab	Gの氏名は郁二郎
72	か	川島小太郎	西蒲原郡	松長村	—	東京市	芝区	白金三光町175	三越湯	G	ab	
73	か	河治三郎	西蒲原郡	松長村	—	荏原郡	碑衾町	碑文谷115	—	F	—	aの経営者は石田平治(第一梅の湯)、bの経営者は藤本保(第一梅の湯)
74	か	柄澤貞治	西蒲原郡	小吉村	—	荏原郡	世田谷町	代田大原1268	澤の湯	G	ab	
75	き	岸本庄次郎	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	麻布区	宮下町29	旭湯	FG	ab	bの屋号は朝日湯
76	き	北粂三代吉	西蒲原郡	道上村	—	荏原郡	碑衾町	碑文谷282	碑文谷湯	G	ab	bの氏名は北條三代吉
77	き	北澤庄平	西蒲原郡	道上村	—	横浜市	神奈川区	小伝馬町266	金川湯	G	a	aの住所は神奈川町266
						横浜市	神奈川区	白幡町111	第二隆盛館	—	a	

78	き	木田繁雄	西蒲原郡	吉田町	—	東京市	神田区	新銀町40	—	G	—	
79	き	木原為吉	西蒲原郡	松長村	松橋	豊多摩郡	淀橋町	柏木119	柏湯	FG	ab	
80	き	木原文平	西蒲原郡	松長村	—	豊多摩郡	渋谷町	南平台20	—	G	—	aの経営者は森川安次郎(梅の湯)、bの経営者は木原フジ(梅の湯)
81	く	串橋清次郎	西頸城郡	青海村	—	横浜市	中区	千歳町1-6	千歳湯	G	a	
82	く	久住辰治郎	三島郡	大河津村	—	東京市	本所区	石原町35	—	ABCD	—	abの経営者は高木正則(梅の湯)
						北豊島郡	西巣鴨町	宮仲2777	福の湯	FG	ab	Fの氏名は辰次郎、aの住所は西巣鴨町巣鴨2777
83	く	熊谷子之七	西蒲原郡	道上村	—	東京市	牛込区	新小川町2-8	熊谷湯	F	ab	
84	く	倉又嘉七	西頸城郡	浦本村	—	北豊島郡	王子町	王子1240	—	FG	—	浴場従業員請負業
85	く	桑原栄太郎	西蒲原郡	吉田町	—	東京市	日本橋区	箱崎町4-1	桜湯	G	a	bの経営者は小林末吉(桜湯)
						東京市	日本橋区	蛎殻町3-11	竹の湯	—	b	aの経営者は坂爪芳太郎(竹の湯)
86	く	桑原五郎	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	小石川区	林町37	濱の湯	G	ab	
87	く	桑原高森	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	四谷区	塩町2-16	柳の湯	G	ab	
88	こ	幸田七治	西蒲原郡	吉田町	—	荏原郡	目黒町	上目黒1633	宿山湯	G	ab	aの住所は上目黒1636
89	こ	幸田又五郎	西蒲原郡	吉田町	鴻ノ巣	東京市	牛込区	神楽町2-19	萬世軒	CDF	ab	
90	こ	小池吉吾郎	古志郡	竹沢村	—	豊多摩郡	杉並町	高円寺892	瀧の湯	G	ab	aの氏名は吉五郎
91	こ	小島吾一	西蒲原郡	松長村	—	東京市	本郷区	駒込千駄木町202	高砂湯	F	ab	aの氏名は吾市
92	こ	小島久五郎	西蒲原郡	松長村	—	東京市	浅草区	田中町63	櫻湯	C	—	abの経営者は松本六松(櫻湯)
						北豊島郡	瀧野川町	田端544	—	D	—	aの経営者は岡田朝次(第一松の湯)、bの経営者は稲垣寅次郎(第一松の湯)
						東京市	下谷区	谷中三崎町32	朝日湯	G	ab	
93	こ	小島龍吉	西蒲原郡	松長村	—	豊多摩郡	渋谷町	下渋谷1308	紅葉湯	F	—	abの住所は渋谷町山下34、経営者は小島亀太郎(紅葉湯)
94	こ	後藤幸次郎	中蒲原郡	白根町	—	横浜市	中区	西戸部境谷1720	—	G	—	浴場従業員請負業
95	こ	小林市平	西蒲原郡	道上村	—	北豊島郡	西巣鴨町	宮仲2192	仲の湯	FG	ab	aの住所は西巣鴨町2192
					—	南足立郡	綾瀬町	柳原449	草津湯	G	ab	aの住所は南綾瀬村柳原292
96	こ	小林斧吉	西蒲原郡	松長村	—	東京市	芝区	新堀町30	桃の湯	G	a	bの経営者は笠原栄七(桃の湯)
97	こ	小林熊治	西蒲原郡	松長村	羽黒	東京市	本所区	太平町1-90	太平湯	F	—	abの経営者は岩田清五郎(太平湯)
98	こ	小林健作	西蒲原郡	道上村	—	北豊島郡	西巣鴨町	池袋1738	前田湯	G	ab	
99	こ	小林廣一	西蒲原郡	国上村	—	荏原郡	南品川町	東広町480	六角湯	F	ab	Gの住所は東広町481
100	こ	小林高栄	西蒲原郡	松長村	—	東京市	浅草区	千束町1-122	藤の湯	G	—	aの経営者は菅山幸次郎(藤の湯)、bの経営者は飛松清之助(藤の湯)
101	こ	小林五作	西蒲原郡	松長村	—	東京市	下谷区	龍泉寺376	瀧の湯	G	ab	Gの氏名は五作、bの番地は365
102	こ	小林三郎	西蒲原郡	松長村	—	荏原郡	平塚村	上蛇窪397	栄湯	F	a	aの住所は荏原町
103	こ	小林次郎作	西蒲原郡	松長村	—	豊多摩郡	杉並町	高円寺964	亀の湯	G	a	bの経営者は小林いし
104	こ	小林竹治	西蒲原郡	道上村	—	横須賀市	深田町	254	池の湯	—	a	
						横須賀市	港町	38	—	G	—	
105	こ	小林忠平	西蒲原郡	松長村	—	東京市	浅草区	南清島町11	日の出湯	G	ab	Gの番地は南清島2
106	こ	小林長五郎	古志郡	山通村	—	東京市	日本橋区	亀島町2-36	武蔵湯	DFG	a	bの経営者は鈴木昌二(武蔵湯)
107	こ	小林常吉	西蒲原郡	松長村	松橋	東京市	芝区	本芝1-32	鶴ノ湯	B	a	aの経営者は山本勇吉(鶴の湯)、bの経営者は牧野兵三郎(鶴の湯)
108	こ	小林當作	西蒲原郡	漆山村	—	南葛飾郡	亀戸町	3729	天神湯	FG	ab	abの住所は亀戸町3-39
109	こ	小林寅治	西蒲原郡	道上村	—	東京市	芝区	三田豊岡町1	豊岡湯	G	ab	
110	こ	小林寅次郎	西蒲原郡	松長村	—	北豊島郡	志村	前野125	前の湯	G	a	bの経営者は廣川ミセ(前野湯)
111	こ	小林虎三	西蒲原郡	松長村	—	東京市	小石川区	小日向水道町20	菊の湯	G	ab	
112	こ	小林寅吉	西蒲原郡	国上村	—	荏原郡	南品川町	二日五日市2	三越湯	F	ab	
113	こ	小林又蔵	古志郡	山通村	—	東京市	芝区	金杉川口町23	亀の湯	DF	ab	
114	こ	小林由平	西蒲原郡	道上村	—	北豊島郡	高田町	雑司ヶ谷646	日の出湯	FG	ab	
115	こ	小林利吉	西蒲原郡	道上村	—	横浜市	中区	千歳町2-14	芝湯	G	a	
116	こ	小林利平次	西蒲原郡	松長村	松橋	東京市	神田区	駿河台西紅梅町6	—	A	—	abの経営者は酒井兼吉(紅葉湯)
117	こ	小見山伊作	北魚沼郡	山辺村	—	横須賀市	中里町	飛地346	大徳湯	G	a	aの住所は中里町346

118	こ	小山惣太郎	中頸城郡	潟町	—	豊多摩郡	中野町	桐ケ谷1156	—	FG	—	abの経営者は稲垣勇次郎(小宝湯)
119	こ	小山市太郎	中蒲原郡	白根町	—	東京市	牛込区	船河原町12	—	C	—	
120	さ	齋藤與作	西蒲原郡	漆山村	—	北豊島郡	西巣鴨町	池袋867	清水湯	G	ab	
121	さ	酒井末治	西蒲原郡	松長村	—	東京市	神田区	表猿楽町2	朝日湯	G	ab	
122	さ	酒井與吉	古志郡	太田村	—	東京市	四谷区	西信濃町12	千歳湯	FG	ab	bの住所は西信濃町3
123	さ	坂爪松治	西蒲原郡	漆山村	—	荏原郡	目黒町	中目黒740	小松湯	G	a	
124	さ	佐々木寅平	西蒲原郡	小吉村	—	横須賀市	不入斗町	2	越の湯	G	a	
125	さ	佐藤一郎	西蒲原郡	道上村	—	豊多摩郡	渋谷町	中渋谷673	弘法湯	F	—	abの経営者は佐藤トシ(弘法湯)
						豊多摩郡	渋谷町	円山81	神泉館	G	—	
126	さ	佐藤栄七	古志郡	中通村	—	東京市	日本橋区	小網町4-6	—	D	—	
127	さ	佐藤作一	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	浅草区	千束町1-1	千歳湯	G	—	abの経営者は鶴巻久太郎(千歳湯)
128	さ	佐藤鯨三郎	南蒲原郡	三条町	一ノ木戸	東京市	京橋区	新栄町1-6	栄湯	ABCDF	ab	
129	さ	佐藤謙治	西蒲原郡	道上村	—	荏原郡	世田谷町	若林1	朝日湯	G	a	bの経営者は竹田林作(朝日湯)
130	さ	佐藤健造	西蒲原郡	道上村	—	豊多摩郡	渋谷町	円山81	神泉館	G	—	abの経営者は佐藤トシ(弘法湯)
131	さ	佐藤佐武郎	西蒲原郡	米納津村	—	荏原郡	大井町	鮫洲151	—	F	—	abの経営者は塚原玉吉(鶴の湯)、bの住所は大井町151
132	さ	佐藤庄一郎	—	—	—	東京市	京橋区	新栄町1-6	—	G	—	
133	さ	佐藤豊蔵	西蒲原郡	道上村	—	豊多摩郡	渋谷町	中渋谷673	弘法湯	ABC	—	abの経営者は佐藤トシ(弘法湯)
134	さ	佐藤直三	南魚沼郡	藪神村	—	南葛飾郡	亀戸町	3-164	大正湯	F	a	bの経営者は高柳善次(大正湯)
135	さ	佐野雪松	西蒲原郡	—	—	東京市	麻布区	坂下町24	鶴の湯	G	ab	
136	し	柴山吉次郎	西蒲原郡	松長村	—	東京市	麻布区	霞町1	朝日湯	G	ab	
137	し	柴山吉太郎	西蒲原郡	燕町	—	東京市	麻布区	霞町1	—	CD	—	abの経営者は柴山吉次郎(朝日湯)
138	し	柴山豊太郎	西蒲原郡	松長村	—	東京市	浅草区	千束町1-122	藤の湯	D	—	aの経営者は菅山幸次郎(藤の湯)、bの経営者は飛松清之助(藤の湯)
						東京市	浅草区	千束町2-366	北松の湯	G	ab	
139	し	篠山亀太郎	西蒲原郡	米納津村	—	東京市	浅草区	千束町3-42	—	C	—	aの経営者は荒井寛治(恵比寿湯)、bの経営者は野澤宏彰(恵比寿湯)
140	し	渋木岩吉	西蒲原郡	粟生津村	—	荏原郡	大井町	鮫洲99	—	F	—	abの経営者は廣野浩通(吉野湯)、bの住所は大井町99
141	し	渋木清三郎	西蒲原郡	四ツ合村	—	荏原郡	目黒町	下目黒986	松ノ湯	F	—	abの経営者は村田健次郎(松の湯)
142	し	渋木久一郎	中蒲原郡	茨曽根村	—	豊多摩郡	千駄ヶ谷町	穏田98	—	G	—	
143	し	清水栄吉	—	—	—	東京市	麻布区	飯倉町5-40	和倉湯	A	ab	
144	し	如澤又一	西蒲原郡	道上村	—	東京市	深川区	千田町126	平和湯	G	ab	
145	し	白山徳次	西蒲原郡	燕町	—	東京市	浅草区	浅草町70	都湯	G	ab	Gの氏名は徳治
146	し	神保仙吉	古志郡	山通村	—	東京市	京橋区	月島通5-10	月島湯	G	ab	
147	し	神保徳四郎	古志郡	山通村	—	東京市	芝区	白金志田町29	松の湯	G	ab	
148	し	神保真佐治	古志郡	山通村	—	北豊島郡	王子町	豊島1358	寿湯	G	ab	
149	す	杉山辰治	西蒲原郡	大原村	—	横浜市	中区	西戸部町岩崎320	—	E	—	aの経営者は大野利津治(杉野館)、住所は石崎1-13
						横浜市	保土ケ谷区	天王町6	杉野館	—	a	
150	す	杉山傳平	西蒲原郡	大原村	—	東京市	浅草区	地方今戸町126	二十世紀湯	ABCDFG	ab	aの番地は地方今戸町100
151	す	諏訪嘉藤治	古志郡	山通村	—	豊多摩郡	代々幡町	幡ヶ谷79	第一山の湯	—	a	bの経営者は中田伊右衛門(第一山の湯)
						豊多摩郡	中野町	打越2121	—	G	b	aの経営者は倉田富彌(天神湯)
152	せ	関根徳治	西蒲原郡	松長村	—	北豊島郡	西巣鴨町	巣鴨1889	旭湯	G	ab	aの住所は西巣鴨1889
153	た	高井英次	古志郡	山通村	—	荏原郡	品川町	南品川三ツ木969	—	F	—	
154	た	高井次一	西蒲原郡	漆山村	—	荏原郡	馬込町	久保803	千代の湯	G	ab	aの氏名は高市
155	た	高橋五三郎	西蒲原郡	漆山村	—	荏原郡	品川	二日市73	新寿湯	G	ab	
156	た	高張兵吉	西蒲原郡	小吉村	—	荏原郡	大井町	坂下2794	—	F	—	aの経営者は碓井久明(喜楽湯)、bの経営者は青柳佐徳(喜楽湯)
						荏原郡	大森町	1624	第二富士見湯	—	a	bの経営者は垣内竹松(第二富士見湯)
157	た	竹内永太郎	西蒲原郡	漆山村	—	北豊島郡	西巣鴨町	巣鴨205	—	F	—	
						北豊島郡	瀧野川町	瀧ノ川883	—	G	—	aの経営者は清水理作(瀧ノ川浴場)、bの経営者は杉野宿太郎(瀧の川浴場)

158	た	竹内徳平	西蒲原郡	道上村	—	東京市	小石川区	雑司ケ谷町3	梅の湯	G	ab	
159	た	竹内平八	西蒲原郡	道上村	—	荏原郡	目黒町	中目黒641	梅の湯	G	ab	aの住所は中目黒614、bの経営者は入軽井盛茂利朔(梅の湯)
160	た	竹石忠治	西蒲原郡	小吉村	—	東京市	小石川区	西丸町40	新栄泉	G	ab	
161	た	武田又造	—	—	—	東京市	牛込区	改代町2	—	B	—	aの経営者は青柳吉衛(武の湯)、bの経営者は青木吉衛(武の湯)
162	た	田代寅雄	西蒲原郡	小中川村	—	東京市	深川区	西平井町150	日の出湯	G	ab	bの番地は145
163	た	田中倉蔵	刈羽郡	横澤村	—	東京市	牛込区	細工町27	—	CDF	—	aの経営者は新田イキヨ(亀の湯)、bの経営者は瀧川常平(亀の湯)
164	た	田中幸吉	西蒲原郡	道上村	—	東京市	下谷区	豊住町38	—	DF	—	abの経営者は石田重太郎(昭和湯)
165	た	田中幸吉	南蒲原郡	三条町	二ノ町	東京市	本所区	北新町95	人参湯	CD	a	bの経営者は田中項耕司(人参湯)、住所は東駒形3-14
166	た	田中正平	西蒲原郡	道上村	—	橘樹郡	鶴見町	983	—	F	—	
						荏原郡	入新井町	新井宿529	旭湯	—	a	bの経営者は川原幸太郎(旭湯)
167	た	田中治平	西蒲原郡	巻町	—	東京市	浅草区	橋場町259	玉の湯	G	ab	
168	た	田原ヤウ	西蒲原郡	月潟村	—	北豊島郡	高田町	高田29	—	G	—	abの経営者は田原寅三郎(高砂湯)
169	た	田村多七	西蒲原郡	漆山村	—	荏原郡	平塚村	上蛇窪551	第三菊の湯	F	ab	aの住所は荏原町
170	た	田村長八	西蒲原郡	松長村	—	東京市	麻布区	森元町1-3	松の湯	G	ab	
171	た	田村虎太郎	西蒲原郡	松長村	姥島	東京市	本郷区	春木町1-33	—	B	—	abの経営者は伊東良二(春の湯)
			西蒲原郡			東京市	浅草区	猿楽町11	亀の湯	G	ab	aの氏名は甫太郎
172	た	田邊子之七	西蒲原郡	漆山村	—	南葛飾郡	小松川町	3-89	春日湯	FG	ab	
173	た	田邊庄二	西蒲原郡	漆山村	—	北豊島郡	尾久町	下尾久295	—	F	—	abの経営者は永桶乙蔵(和倉湯)
						東京市	本所区	柳原町2-21	東鏡湯	G	a	bの経営者は北野唯一(梅の湯)
174	た	田邊清治	西蒲原郡	漆山村	—	豊多摩郡	淀橋町	柏木995	—	G	—	bの経営者は棚橋與惣次(寿湯)
175	た	田邊仁平	西蒲原郡	漆山村	—	横須賀市	深田町	—	鶴声館	—	a	
						横須賀市	公郷町	2249	—	G	—	
176	た	田野清八	西蒲原郡	小中川村	—	北豊島郡	板橋町	下板橋3219	—	F	—	aの経営者は寺橋彌一郎(朝日湯)、bの経営者は伊伝亀吉(朝日湯)
177	た	田野久平	西蒲原郡	小中川村	三王淵	東京市	本郷区	金助町30	—	ABC	—	aの経営者は菅山太七(山田湯)
						荏原郡	入新井町	不入斗649	東海泉	F	—	aの経営者は瀬戸隆(東海泉)、bの経営者は村上正二(東海泉)
178	た	田巻與太郎	西蒲原郡	燕町	—	東京市	浅草区	田島町33	—	A	—	abの経営者は田中乙助(弘法湯)
179	つ	塚原玉吉	西蒲原郡	吉田町	—	北豊島郡	板橋町	下板橋2002	—	F	—	abの経営者は加藤助松(越の湯)
180	つ	塚原萬吉	西蒲原郡	吉田町	—	荏原郡	大井町	瀧王子4558	花の湯	FG	ab	aの住所は大井町4582
181	つ	土田藤一郎	西蒲原郡	漆山村	—	南足立郡	千住町	中組859	旭湯	G	ab	
182	つ	土田彌傳治	西蒲原郡	燕町	—	豊多摩郡	代々幡町	幡ヶ谷6	開盛湯	G	a	aの氏名は弥平治、bの経営者は伊藤成行(開盛湯)
183	つ	綱喜七	北魚沼郡	稗生村	—	東京市	本郷区	森川町80	七宝湯	G	ab	Gの住所は森川町大学正門前、aの屋号は七宝泉
184	つ	津野作治	西蒲原郡	大原村	—	北豊島郡	高田町	雑司ケ谷715	—	F	—	aの経営者は小林精市(寿美齢湯)、bの経営者は日光豊太郎(寿美齢湯)
185	つ	津野恒三郎	西蒲原郡	大原村	—	南葛飾郡	四ツ木	162	富士の湯	G	ab	aの氏名は澤野恒三郎
186	つ	鶴巻金平	西蒲原郡	漆山村	—	豊多摩郡	千駄ヶ谷町	549	鶴乃湯	F	—	abの経営者は石山三郎(鶴の湯)
187	つ	鶴巻久太郎	西蒲原郡	漆山村	並岡	東京市	牛込区	佐内町38	—	F	—	abの経営者は山田要平(谷の湯)
						東京市	浅草区	千束町1-14	—	F	—	Fの出身地は並木
						東京市	浅草区	千束町1-1	千歳湯	G	ab	
188	て	寺島今吉	西蒲原郡	漆山村	—	豊多摩郡	大久保町	東大久保443	日の出湯	G	ab	aの氏名は寺嶋
189	て	照田忠雄	西蒲原郡	中野小屋村	—	北豊島郡	西巣鴨町	池袋1923	喜楽湯	G	ab	
190	と	登坂健三郎	西蒲原郡	小中川村	—	北豊島郡	西巣鴨町	池袋924	平和湯	G	ab	
191	と	戸田三平	古志郡	栖吉村	—	東京市	四谷区	新宿町1-49	鶴王湯	G	a	aの住所は新宿1-79、bの屋号は桜湯
192	と	富山喜三郎	西蒲原郡	漆山村	—	南葛飾郡	亀戸町	3-39 小林當作方	—	F	—	abの経営者は小林當作(天神湯)
193	と	富山幸治	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	麹町区	上六番町40	鏡湯	FG	ab	
194	と	富山太三郎	西蒲原郡	道上村	—	北豊島郡	瀧野川町	御代ノ台1427	亀の湯	G	ab	aの住所は三代ノ台1427
195	と	富山寅四郎	南蒲原郡	本成寺村	—	東京市	赤坂区	青山南町5-49	長寿湯	FG	ab	

196	と	富山勇作	西蒲原郡	漆山村	小高	東京市	牛込区	白銀町2	—	F	—	abの経営者は米山佐和二(妙法湯)
					—	東京市	牛込区	中里町28	和倉湯	F	ab	
197	と	外山季語	西蒲原郡	小吉村	東船越	東京市	下谷区	谷中坂町77	—	B	—	abの経営者は小林忠作(草津湯)
198	と	頓所重一郎	西蒲原郡	米納津村	—	東京市	深川区	古石場町22	恵比寿湯	FG	ab	
199	と	頓所富八	西蒲原郡	米納津村	—	北豊島郡	西巣鴨町	宮仲209	—	G	—	aの経営者は頓所ミサ(宮仲湯)、bの経営者は頓所みち(宮仲湯)
200	と	頓所又蔵	西蒲原郡	米納津村	—	北豊島郡	巣鴨町	2-23	藤の湯	G	a	bの経営者は八百坂新助(藤の湯)
201	と	頓所世根吉	西蒲原郡	米納津村	—	荏原郡	目黒町	中目黒1085	効明泉	G	ab	aの住所は中目黒1058、bの屋号は効明湯
202	な	永井逸造	西蒲原郡	漆山村	—	南葛飾郡	亀戸町	2-115	五柳湯	F	ab	aの住所は亀戸町2-11、bの屋号は柳湯
203	な	永井啓之	西蒲原郡	巻町	—	南足立郡	千住町	2-891	—	G	—	abの経営者は永井豊平(ニコニコ湯)
204	な	永井六蔵	西蒲原郡	小中川村	—	荏原郡	大井町	浜川1105	—	F	—	aの経営者は藤木敬義(三越湯)、bの経営者は平野久松(三越湯)
205	な	梨本千代吉	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	本郷区	駒込動坂町112	—	G	—	
206	な	長沼庄平	西蒲原郡	道上村	打越	東京市	本所区	向島須崎町59	花の湯	ABC	—	aの経営者は洲崎留吉(花の湯)、bの経営者は小崎藤造(花の湯)
						東京市	本所区	押上町88	—	F	—	aの経営者は田村つる(泉湯)、bの経営者は長嶋兼吉(泉湯)
207	な	中村喜三郎	古志郡	山通村	—	東京市	赤坂区	榎坂町4	大和湯	G	ab	
208	な	中村竹次	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	神田区	錦町3-19	—	ABC	—	abの経営者は井上常二(錦湯)
						東京市	麻布区	竹谷町5	—	DF	—	Fの氏名は竹治
209	な	中村藤吉	西蒲原郡	漆山村	馬堀	東京市	牛込区	市ケ谷本村町2	—	F	—	aの経営者は山下千秋(草津湯)、bの経営者は小林梅治(草津湯)
210	な	中山勝治	西蒲原郡	燕町	—	東京市	赤坂区	青山北町1-8	—	F	—	aの経営者は中山寅蔵(草津湯)、bの経営者は小林由松(草津湯)
						東京市	本郷区	湯島切通坂町50	草津湯	G	a	bの経営者は早川辰三(草津湯)
211	な	中山金蔵	西蒲原郡	燕町	—	南葛飾郡	吾嬬町	請池184	並川湯	G	ab	bの住所は吾嬬町東2-77
212	な	中山平之助	西蒲原郡	燕町	—	東京市	赤坂区	表町2-3	五色湯	G	ab	Gの住所は表町2-6
213	な	梨本政吉	西蒲原郡	米納津村	—	荏原郡	世田谷町	下北沢866	—	G	b	aの経営者は土井繁次(清水湯)
214	な	成田きく	中蒲原郡	茨曽根村	—	南葛飾郡	本田町	渋江30	—	G	—	abの経営者は成田ヤソ(竹の湯)
215	な	成瀬勇吉	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	日本橋区	亀井町7	亀の湯	G	ab	
216	な	成瀬由太郎	西蒲原郡	漆山村	—	豊多摩郡	和田堀町	119	第二亀の湯	G	ab	aの住所は和田堀町方南219
217	な	南波勇蔵	西蒲原郡	松長村	—	南足立郡	梅島町	栗原1256	花の湯	G	ab	
218	に	西原喜蔵	古志郡	太田村	—	荏原郡	目黒町	上目黒337	亀の湯	G	ab	aの住所は上目黒369、氏名は喜造
219	に	西村定治	西蒲原郡	小中川村	—	北豊島郡	西巣鴨町	池袋1738	—	F	—	abの経営者は小林健作(前田湯)
220	に	西村龍吉	西蒲原郡	道上村	—	東京市	浅草区	馬道町4-3	大黒湯	G	ab	aの経営者は西村龍太郎、Gの番地は4-4
221	の	野内誠	西蒲原郡	月潟村	東長嶋	東京市	浅草区	亀岡町3-37	桐の湯	BC	—	aの経営者は野内誠(桐の湯)、bの経営者は高木己代治(桐の湯)
222	の	野口熊蔵	古志郡	上組村	—	東京市	芝区	三田3-20	—	D	a	abの経営者は山本作次郎(田中湯)
223	の	野口次郎松	古志郡	上組村	—	南葛飾郡	吾嬬町	請地386	—	G	—	
224	の	野口ツマ	古志郡	山通村	—	南葛飾郡	寺島町	玉ノ井623	越の湯	FG	ab	aの住所は寺島町寺島623
225	の	野口鶴吉	古志郡	上組村	—	南葛飾郡	吾嬬町	請地429	鶴堤湯	FG	ab	Fの番地は請地439、bの住所は吾嬬町東2-97
226	の	野澤留吉	西蒲原郡	松長村	—	東京市	本郷区	湯島天神町3-1	桜湯	G	ab	
227	は	羽賀清蔵	古志郡	山通村	—	北豊島郡	西巣鴨町	宮仲2018	—	FG	—	aの経営者は佐伯貞次郎(日之出湯)、bの経営者は長谷川優仲次(日の出湯)
228	は	長谷川熊次	西蒲原郡	松長村	羽黒	東京市	牛込区	水道町27	—	AB	—	abの経営者は原田平次(明治泉)
229	は	長谷川惠造	西蒲原郡	巻町	—	東京市	麹町区	麹町13-27	—	G	—	
230	は	長谷川俊治	西蒲原郡	道上村	打越	荏原郡	入新井町	不入斗332	—	FG	—	abの経営者は登坂瀬太郎(梅の湯)
						荏原郡	入新井町	新井宿道免1129	第二南の湯	G	ab	
231	は	長谷川権二郎	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	浅草区	山谷町70	初音湯	G	a	aの氏名は権次郎、bの経営者は藤田タセ
232	は	長谷川治平	西蒲原郡	漆山村	—	横須賀市	公郷町	池ノ端254	—	G	—	
233	は	羽広マユ	西蒲原郡	漆山村	—	荏原郡	大井町	1628	—	FG	—	abの経営者は福原乙吉(大黒湯)
						荏原郡	大森町	1088	大黒湯	—	ab	
234	は	羽深王吉	東頸城郡	牧村	—	東京市	本所区	林町3-43	—	FG	—	
235	は	早川竹造	西蒲原郡	松長村	—	東京市	神田区	今川小路2-1	錦泉湯	G	ab	abの氏名は竹蔵

236	は	林直次	東頸城郡	松之山村	—	北豊島郡	高田町	雑司ヶ谷211	—	FG	—	abの経営者は柳橋藤市(藤の湯)
237	は	原仁吉郎	古志郡	太田村	—	南葛飾郡	寺島町	寺島753	玉の湯	—	a	bの経営者は加藤喜七郎(玉の湯)
						南葛飾郡	吾嬬町	小村井379	—	G	b	aの経営者は中島作右衛門(日の出湯)
238	は	原本蔵	西蒲原郡	道上村	—	東京市	下谷区	金杉上町101	弁天湯	G	ab	
239	ひ	樋口佐治	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	小石川区	大塚仲町53	萬歳湯	G	ab	bの氏名は作治、aの番地は仲町54、bの番地は仲町55
240	ひ	比護末治	中頸城郡	下黒川村	—	横須賀市	諏訪町	37	大黒湯	G	—	
241	ひ	平岡庄次郎	西蒲原郡	道上村	—	豊多摩郡	杉並町	田端1	関の湯	G	a	bの経営者は佐伯久(関の湯)
242	ひ	平岡忠平	西蒲原郡	道上村	—	東京市	浅草区	新旅籠町2	梅の湯	G	a	bの経営者は高井英次(梅の湯)
243	ひ	平岡信之助	西蒲原郡	道上村	—	東京市	牛込区	市ヶ谷谷町90	紅葉湯	FG	—	abの経営者は平岡スイ(紅葉湯)
244	ひ	平澤サク	—	—	—	東京市	浅草区	東仲町13	—	G	—	
245	ひ	平野栄吉	古志郡	山通村	—	東京市	芝区	本芝町3-6	梅の湯	G	ab	
246	ひ	廣川乙蔵	西蒲原郡	松長村	—	東京市	小石川区	丸山町21	北越泉	G	ab	
247	ひ	廣川久四郎	西蒲原郡	松長村	—	北豊島郡	志村	前野125	—	G	—	aの経営者は小林寅次郎(前の湯)
248	ふ	深海金治	西蒲原郡	太田村	—	南葛飾郡	亀戸町	五ノ橋406	五の橋湯	FG	ab	aの住所は亀戸町6-31
249	ふ	深澤乙八	西蒲原郡	米納津村	—	東京市	下谷区	真島町2	真島湯	F	ab	
250	ふ	深澤熊蔵	西蒲原郡	米納津村	—	荏原郡	荏原町	下蛇窪71	—	F	—	
251	ふ	深澤珍平	西蒲原郡	米納津村	佐渡山	東京市	下谷区	真島町2	真島湯	ABCD	—	abの経営者は深澤乙八(真島湯)
252	ふ	深澤米吉	西蒲原郡	米納津村	—	東京市	下谷区	三ノ輪町106	三の輪湯	G	ab	
253	ふ	藤井寅市	西蒲原郡	小中川村	—	東京市	本郷区	湯島新花町39	花の湯	G	ab	
254	ふ	藤澤石太郎	西蒲原郡	漆山村	漆山	東京市	牛込区	早稲田鶴巻町305	亀の湯	B	ab	
255	ふ	藤澤金次郎	西蒲原郡	漆山村	元漆山	東京市	四谷区	塩町3-8	—	AB	—	
256	ふ	藤島文雄	刈羽郡	柏崎町	—	東京市	浅草区	今戸町98	—	G	—	湯花商
257	ふ	藤田勇松	西蒲原郡	松長村	—	東京市	深川区	入船町4	—	G	—	aの経営者は神谷文衛門(梅の湯)、bの経営者は西村繁太郎(梅の湯)
258	ほ	北條彌藤次	西蒲原郡	松長村	長所	南葛飾郡	吾嬬町	請池323	改良湯	FG	ab	
259	ほ	星野竹次郎	西蒲原郡	米納津村	—	南葛飾郡	小松川町	4-10	—	F	—	
						南葛飾郡	小松川町	2-45	—	G	—	
260	ほ	星野知十郎	西蒲原郡	—	—	荏原郡	大森町	貴船2823	日の出湯	G	ab	
261	ほ	星野富治	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	下谷区	御徒士町2-16	武蔵湯	FG	a	bの経営者は星野隆次(武蔵湯)
262	ほ	星野正雄	西蒲原郡	燕町	—	東京市	小石川区	音羽町8-9	五色湯	G	ab	
263	ほ	星野祐吉	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	下谷区	車坂町115	カルルス湯	F	ab	aの番地は116
						荏原郡	大井町	2596	伊藤湯	—	b	aの経営者は細野兼吉(伊藤湯)
264	ほ	細野兼吉	西蒲原郡	—	—	荏原郡	大井町	2596	伊藤湯	F	a	aの住所は大井町2696、bの経営者は星野祐吉(伊藤湯)
265	ほ	堀川傳一	西蒲原郡	漆山村	—	東京市	麹町区	麹町11-9	—	FG	—	
266	ほ	本田作治	—	—	—	南葛飾郡	吾嬬町	大畑48	小松湯	G	a	bの経営者は久保関次(小松湯)
267	ほ	本間治三郎	—	—	—	東京市	牛込区	市ケ谷谷町93	—	D	a	abの経営者は舟木岩松(碇湯)、bの住所は市ヶ谷台町14
268	ほ	本間松蔵	西蒲原郡	小吉村	—	荏原郡	大井町	森前5556	栄湯	FG	ab	Gの出身地は小池村
269	ま	松井勝次	西蒲原郡	松長村	—	北豊島郡	尾久町	上尾久1851	—	F	—	aの経営者は橋本寶次郎(大黒湯)、bの経営者は志賀口林太郎(大黒湯)
270	ま	松井金一郎	西蒲原郡	松長村	—	北豊島郡	王子町	豊島2606	久松湯	G	ab	Gの住所は豊島2605
271	ま	松井久七	西蒲原郡	松長村	—	東京市	芝区	三田四国町5	萬歳湯	G	ab	
272	ま	松永せみ	西蒲原郡	小吉村	—	荏原郡	大崎町	居木橋507	玉の湯	FG	ab	Gの氏名はミセ
273	ま	丸山軍平	西蒲原郡	小中川村	—	荏原郡	目黒町	下目黒986	—	G	—	abの経営者は村田健次郎(松の湯)
274	ま	丸山清作	三島郡	大河津村	五千石	東京市	浅草区	今戸町113	朝日湯	BCD	ab	
275	ま	丸山金松	西蒲原郡	燕町	—	東京市	浅草区	新旅籠町2	—	AB	—	aの経営者は平岡忠平(梅の湯)、bの経営者は高井英次(梅の湯)
276	ま	丸山儀松	西蒲原郡	燕町	—	東京市	浅草区	新旅籠町2	—	CDF	—	Cの氏名は義松、aの経営者は平岡忠平(梅の湯)
						東京市	芝区	白金志田町78	朝日湯	G	ab	
277	み	宮川末造	西蒲原郡	吉田町	—	北豊島郡	南千住町	千住南47	竹の湯	FG	ab	bの住所は南千住5-31

278	み	宮島園吉	刈羽郡	鵜川村	—	東京市	京橋区	新佃東町1-6	寿湯	G	ab	Gの氏名は宮島周吉
279	み	村松平松	西蒲原郡	小中川村	—	荏原郡	大森町	鹿島谷880	—	F	—	abの経営者は大門陽逸（大黒湯）、bの屋号は錦湯
280	み	室橋松蔵	高田市	—	—	東京市	小石川区	表町108	常盤湯	G	ab	
281	み	松井久七	西蒲原郡	松長村	長渡	北豊島郡	南千住町	千束896	—	D	—	aの経営者は小林佐市（常磐湯）、bの経営者は小林佐市（常磐湯）
282	み	松永寅之寿慶	西蒲原郡	松長村	松橋	東京市	本郷区	湯島天神町1-24	—	ABC	—	aの経営者は室乙松（五宝湯）、bの経営者は水島誠（五宝泉）
283	み	宗村石松	古志郡	山通村	—	東京市	芝区	三田松坂町49	櫻湯	G	ab	
284	み	宗村惣四郎	古志郡	山通村	青木	東京市	麹町区	飯田町3-10	—	AB	—	aの経営者は櫻井達次郎（朝日湯）、bの経営者は親谷源太郎（朝日湯）
285	み	宮本熊太郎	西蒲原郡	松長村	真木	東京市	牛込区	市ヶ谷柳町7	—	BCD	—	aの経営者は飛松清之助（柳湯）、bの経営者は宮本ぎん（柳湯）
286	む	村山猪太郎	北魚沼郡	山辺村	—	東京市	牛込区	北山伏町19	港湯	G	—	abの経営者は村山ツネ（港湯）
287	む	村山石蔵	中魚沼郡	下条村	—	東京市	浅草区	田中町105	大黒湯	G	ab	Gの氏名は貞造
288	む	村山繁松	北魚沼郡	山辺村	池の原	東京市	牛込区	北山伏町19	港湯	ABCD	—	abの経営者は村山ツネ（港湯）
289	む	村山寅吉	西蒲原郡	松長村	長所	東京市	神田区	小川町1	—	AB	—	abの経営者は山田早苗（稲川楼）
290	む	村山鶴松	西蒲原郡	松長村	—	豊多摩郡	戸塚町	下戸塚569	—	AB	—	aの経営者は渋木岩吉（松の湯）、bの経営者は千野龍太郎（松の湯）
291	む	村山平八	西蒲原郡	松長村	—	東京市	深川区	西平井町66	富士見湯	G	ab	
292	や	八百坂安治	西蒲原郡	松長村	—	東京市	浅草区	橋場町259	—	G	—	abの経営者は田中治平（玉の湯）
293	や	八百坂吉平	西蒲原郡	松長村	—	豊多摩郡	中野町	橋場3874	宝湯	G	a	aの住所は中野町中野3847、bの経営者の島井三雄太（宝湯）
294	や	保倉廣吉	西蒲原郡	小中川村	—	横浜市	中区	根岸町麦田3781	藤の湯	—	a	
					—	横浜市	中区	石川仲町6-131	—	G	—	
295	や	保倉清次郎	西蒲原郡	小中川村	—	北豊島郡	練馬横町	—	—	G	—	
296	や	保倉善治	西蒲原郡	道上村	—	東京市	深川区	深川東町46	東湯	F	—	aの経営者は薄清（東湯）、bの経営者は渡邊長次郎（東湯）
						豊多摩郡	井荻町	上井草1361	三原湯	—	a	bの経営者は野越親雄（三原湯）
297	や	山上長治	西蒲原郡	吉田町	吉田	東京市	神田区	元柳原町25	和泉湯	AB	—	abの経営者は山上正司（和泉湯）
298	や	山崎兼吉	西蒲原郡	松長村	—	北豊島郡	西巣鴨町	宮仲2142	鴨の湯	FG	ab	
299	や	山崎清三郎	西蒲原郡	小吉村	—	東京市	下谷区	龍泉寺町26	龍清湯	G	a	bの経営者は山崎政義（龍清湯）
300	や	山道兼太	刈羽郡	横澤村	—	東京市	芝区	新網町南7	鯉の湯	G	a	bの経営者は岡山道太郎（鯉の湯）
301	や	山田桂助	西蒲原郡	道上村	—	東京市	浅草区	浅草町3	梅の湯	DFG	a	Gの出身地は小吉村、氏名は圭助、bの経営者は山田トシ（梅の湯）
302	や	山田清造	西蒲原郡	小吉村	—	東京市	本所区	松井町1-32	—	AB	—	abの経営者は山岸茂也（越の湯）
303	や	山田長作	西蒲原郡	小吉村	—	東京市	浅草区	浅草町70	—	F	—	abの経営者は白山徳次（都湯）
					—	東京市	四谷区	南伊賀町1 加藤ソノ方	—	F	—	
304	や	山田長治郎	西蒲原郡	巻町	—	東京市	神田区	永富町9 田中方	松の湯	G	ab	松の湯の経営者は田中啓造（松の湯）
305	や	山田政吉	西蒲原郡	燕町	—	東京市	牛込区	富久町75	富士見湯	G	ab	
306	や	山本保男	西蒲原郡	米納津村	—	南葛飾郡	本田町	渋江187	旭湯	G	a	aの住所は渋江199、bの経営者は横山升二（旭湯）
307	や	山保前太郎	西蒲原郡	大原村	—	荏原郡	大井町	立会520	—	F	—	abの経営者は山保五三郎（朝日湯）
308	ゆ	幸村清助	西蒲原郡	間瀬村	—	東京市	小石川区	竹早町4	—	AB	—	aの経営者は堀そい（群鳳泉）、bの経営者は堀峯蔵（群鳳泉）
						東京市	神田区	佐柄木町2	鶴の湯	—	b	
309	ゆ	幸村佐吉	西蒲原郡	間瀬村	—	東京市	神田区	佐柄木町2	—	AB	—	aの経営者は本田留治（有楽泉）、bの経営者は幸村清助（鶴の湯）
310	よ	吉田栄次郎	三島郡	大河津村	—	東京市	四谷区	須賀町	草津湯	G	ab	aの住所は南伊賀町57
311	よ	吉田清一郎	西蒲原郡	吉田町	—	東京市	本郷区	湯島新花町68	松の湯	G	ab	
312	よ	吉田清太郎	西蒲原郡	吉田町	—	東京市	本郷区	湯島新花町68	松の湯	ABC	—	abの経営者は吉田清一郎（松の湯）
313	よ	吉田常吉	古志郡	山通村	—	南葛飾郡	隅田町	182	二松湯	G	a	aの住所は隅田町1822、吉田祐康
314	よ	米山左和二	西蒲原郡	小中川村	—	荏原郡	大井町	倉田3454	—	F	—	aの経営者は八百坂新助（竹の湯）、bの経営者は阿部市松（竹の湯）
						東京市	牛込区	白銀町2	妙法湯	—	ab	
315	わ	湧井徳蔵	西蒲原郡	国上村	—	北豊島郡	瀧野川町	瀧ノ川169 小林當作方	富寿の湯	FG	ab	FGの氏名は涌井徳蔵
316	わ	渡邊猪松	北魚沼郡	田川入村	—	南葛飾郡	亀戸町	4-211	—	F	—	
317	わ	渡邊丑松	西蒲原郡	大原村	—	荏原郡	大井町	森下4082	第二日の出湯	FG	ab	aの住所は大井町4082
318	わ	渡邊健三	北魚沼郡	田麦山村	—	豊多摩郡	淀橋町	角筈207	—	G	—	

319	わ	渡邊末治	西蒲原郡	漆山村	―	南葛飾郡	亀戸町	6-112	―	F	―	

※1：出典は以下の通りである。
〔県人名簿〕
出典A＝小柳市造編『大正五年 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1916年）
出典B＝小柳市造編『大正六年九月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1917年）
出典C＝齋藤廣蔵編『大正八年十一月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1919年）
出典D＝齋藤廣蔵編『大正十年十一月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、1921年）
出典E＝新潟県人親睦会事務所編『大正十三年十二月現在 新潟県人親睦会々員名簿』（新潟県人親睦会事務所、1924年）
出典F＝遠藤謹吾編『大正十五年度版 新潟県人々員名簿』（新潟県人会、1925年）
出典G＝高橋竹治編『昭和五年五月現在 最新全国新潟県人会々員名簿』（三栄舎、1930年）
〔浴場名簿〕
出典a＝前田健太郎編『昭和四年三月調査　六大都市府県下浴場名鑑』（浴場新聞社、1929年）
出典b＝長崎驥編『昭和六年四月現在 東京浴場名簿』（東京浴場新聞社、1931年）
※2：「備考」では、名簿別の記載情報の違いを示したほか、経営者の変化等も記した。
※3：県人名簿と浴場名簿を照合して、出身地等に明らかな間違いがある場合は修正を加えた。

山上長治と山上正司〔和泉湯〕、（299）山崎清三郎と山崎政義〔龍清湯〕、（307）山保前太郎と山保五三郎〔朝日湯〕、（308）幸村清助と（309）幸村佐吉〔鶴の湯〕、（311）吉田清一郎と（312）吉田清太郎〔松の湯〕などである。これらは同姓であることから親族であろう。また、漆山村出身の（25）伊藤介三郎、（187）鶴巻久太郎、（127）佐藤作一の3人は順番に浅草区千束町の千歳湯を経営しており、地縁に基づく浴場の継承例もあった。

続いて（108）小林當作の事例からグループ形成の一端が窺える。漆山村出身の小林は南葛飾郡亀戸町で「天神湯」を経営するだけでなく、北豊島郡瀧野川町の「富寿の湯」を所有しており、その経営を子分と考えられる国上村出身の（315）湧井徳蔵に預けていた。県人会名簿の湧井の住所に「瀧ノ川169 小林當作方」とある点は、そうした小林と湧井との関係を示している。また、隣湯である瀧野川町字瀧ノ川131の「宝来湯」も経営者が同性の湧井勇一郎なので、おそらく親族であろう。滝野川方面で小林・湧井グループが成功していたと推察できる[41]。他方、1925年の県人会名簿Ｆには小林の「天神湯」で働く漆山村出身者の名前があるものの、1929年以降の浴場名簿では確認できない。その人物がどのような道を歩んだかわからないが、浴場業界から退いた可能性も考えられる。既述の通り、過酷な労働環境ゆえ、すべての上京者が成功したわけではなかった[42]。努力を重ねた成功者の陰には、それが報われず、挫折していった者も数多くいたのである。

さらに（84）倉又喜七と（94）後藤幸次郎の2人のみだが、浴場労働請負業者の出身地も確認することができた。「三助物語」は「部屋」の寄親も三助出身と指摘しているので、倉又や後藤も血縁・地縁の浴場で修行した後、労働力の請負業者として独立したと考えられる[43]。加えて、業界が血縁・地縁を重視していたことから、倉又や後藤は自らの出身地を中心に、新潟県人を多く使用したと推察できる。前者を別の史料から確認することはできないが、後者についてはｅ掲載の神奈川県浴場従業員請負業組合の広告にその名前が記されていた。続いてｆを確認すると、同組合は中区末吉町に事務所を置く横浜浴場従業員供給合名会社に改編され、後藤も引き続きその構成員に名を連ねていた。こうした部屋制度改編の動きは岩本通弥も指摘しており、浴場組合名簿の情報からも裏付けられる[44]。

以上のように、県人会名簿と浴場組合名簿を体系的に分析することで、部分的であるが、浴場業界における新潟県人の動きを明らかにすることができ、また、先行研究の聞き取り調査で指摘されてきた事象を史料から裏付けることもできた。各種名簿に記載された浴場業者が示すように、西蒲原郡を中心に浴場業界に入った新潟県人は、血縁・地縁を頼りに京浜地域に根づく一方、親分となった人々は同郷の若者を支援しつつ、業界内で力を発揮、自らの勢力を伸ばしていったのである。

おわりに

京浜地域の人口増加は浴場業の需要を生み、それを支える北陸地方出身者の上京を促していった。東京市では、1916（大正5）年の1,024軒を頂点に浴場数は飽和状態となったが、郡部では、隣接する荏原郡、豊多摩郡、北豊島郡、南足立郡、南葛飾郡を中心に浴場数は増加、1923年9月の関東大震災を契機に、市部と郡部の浴場数は逆転することになった。これは郡部への人口移動を意味しており、特に東京と横浜との間では都市化が急速に進んでいく。また、増加した浴場は北陸地方出身者の新たな受け皿となり、上京した若者たちは、同郷の親分のもと、厳しい修行を重ねながら独立をめざしていった。

一方、人材の供給源は北陸地方でも特定に地域に限られていた。東京の浴場業者の半分を占めた新潟県人は、その7割以上が西蒲原郡の出身者で、さらに打越を結節点とする松長村、漆山村、道上村の出身者が半分以上であった。この地域が浴場業者輩出の中心地と考えて間違いないだろう。また、同じ西蒲原郡でも平野部以外は少なく、先に示した中心地から離れるほど浴場業者の数は減っていった。つまり、新潟県人が多いとされる浴場業者像は、主に蒲原平野の中央部、鎧潟以南から中之口川左岸地域の人々の活動によって形づくられたのである。その状況は戦後も変わらず、1960（昭和35）年段階においても、西蒲原郡出身者が浴場業を営む新潟県人の7割を占めていた。

さて、これまで検討してきたように、県人会名簿から319人分の浴場業者の出身地及び営業場所を抽出し、浴場組合名簿等の情報を加えながら活動状況について分析を加えた。その過程で明らかになったのは、経営者だけでなく、労働力の請負業者を含め、新潟県人が業界に根を張っていた点である。西蒲原郡出身者を中心に、新潟県人は強力なグループを形成、近世から近代に移行する過程を通じて、浴場業界の労働力を独占していった。おそらく石川県人や富山県人の浴場業者たちも同じ道を辿ったと考えられる。

ここで二つの疑問が浮かび上がってくる。一つは西蒲原郡出身者がどのようにして浴場業界に進出したのか、換言すれば、如何にして労働力を独占するシステムを構築していったのか、という点である。この点は上京した浴場業者の世代を踏まえながら、明らかにする必要があるだろう。第二は県人会名簿に記載されていない浴場業者の存在である。県人会非加入の浴場業者はどのような活動をしたのか、こうした点に関しては、郷里に対する出郷者の寄付行為、具体的には神社に残る寄進物等の分析から解明していきたい。

注

（1）町田忍『銭湯―「浮世の垢」も落とす庶民の社交場―』（ミネルヴァ書房、2016年）78～82頁。

（2）古厩忠夫『裏日本―近代日本を問いなおす―』（岩波書店、1997年）45～48頁。

（3）大島美津子・佐藤誠朗・古厩忠夫・溝口敏麿『新潟県の百年』（山川出版社、1990年）239～240頁。また、古厩は新潟県編『新潟県史 通史編8 近代三』（新潟県、1988年）274～289頁において浴場業を含めた新潟県の出稼ぎ労働について整理している。

（4）金崎肇「石川県人と大都市の浴場業」（『地理』第6巻第4号、1961年4月）。

（5）戦後、1970年代後半の例になるが、池袋浴場組合編『半世紀の思いで』（池袋浴場組合、1978年）所収の「組合員紹介」（45～50頁）に依れば、組合23軒中、経営者の出身地は東京都5人、新潟県4人、石川県9人、富山県3人、その他2人で、北陸地方出身者の割合は全体の約70％（小数点以下、四捨五入。以下同じ）、板橋浴場組合編『創立50周年記念誌』（板橋浴場組合、1979年）所収の「組合員紹介」（74～88頁）に依れば、組合58軒中、東京都27人、新潟県9人、石川県13人、富山県5人、その他4人で、北陸地方出身者の割合は全体の約47％であった。いずれも創業者が北陸地方出身であっても、二代目以降が東京生まれの場合はそれを採用しているので、北陸地方出身者の割合はもっと大きいと考えられる（なお、東京出身者でも記述内容から創業者が北陸地方出身と考えられる場合はそちらに加えた）。また、1986年刊行の練馬浴場組合編『練馬浴場組合六十周年記念誌』（練馬浴場組合）の「役員・組合員」（111～170頁）では、54軒中、新潟県18人、富山県6人、石川県7人、東京都17人、その他6人で、北陸地方出身者の割合は57％であった。さらに2000年代以降の例では、東京都公衆浴場業生活衛生同業組合新宿浴場組合編『新宿浴場組合の15年の歩み―牛込・四谷・淀橋・戸塚組合80周年記念誌』（新宿浴場組合、2010年）が浴場経営者の出身地をまとめており、それぞれ創業者のルーツまで遡っている。それに依ると、33軒中、新潟県12人、石川県14人、富山県3人で全体の約88％（54～86頁）となっている。一方、横浜でも横浜市浴場協同組合50周年記念誌制作実行委員会編『横浜を知るには銭湯が一番 さあ、ヨコハマ銭湯へ行こう！』（横浜市浴場協同組合、2010年）が出身地をまとめている。それに依ると、営業中の105軒の浴場中、新潟県24人、石川県46人、富山県7人、福井県4人で北陸地方出身者が全体の約77％を占めていた（82～85頁）。

（6）人文地理学では、宮崎良美「石川県南加賀地方出身者の業種特化と同業団体の変容―大阪府の公衆浴場業者を事例として―」（『人文地理』第50巻第4号、1998年8月）、社会学では湯浅俊郎「都市同郷団体の生成と変容―石川県小松市、加賀市出身者を事例にして―」（『同志社社会学研究』第3号、1999年3月）、鰺坂学・湯浅俊郎・星眞理子・吉原千賀・杉本久未子「都市―農村関係と都市移住者―石川県小松市出身者を中心として―」（『同志社社会学研究』第5号、2001年）、湯浅俊郎「風呂屋と地域社会形成―戦後の風呂屋を担った都市移住者を視点にして―」（『歴博』第142号、2007年5月）など。

（７）谷口貢「都市における同郷者集団の形成と故郷観―新潟県西蒲原地方の出郷者と東京の風呂屋・銭湯の展開―」（松崎憲三編『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院、2002年）。

（８）山口拡「東京の銭湯と同郷の結びつき―新潟県出身者を事例に―」（『民俗学論叢』第27号、2012年5月）。

（９）星野剛『湯屋番五十年 銭湯その世界』（草隆社、2006年）、笠原五夫『東京銭湯三國志』（文芸社、2010年）、同『絵でみるニッポン銭湯文化』（里文出版、2016年）など。

(10) 拙稿「横浜公衆浴場史研究序説」（横浜開港資料館・横浜市歴史博物館編『銭湯と横浜』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2018年）。

(11) 警視庁編『明治二十四年 警視庁事務成績』（警視庁、1893年）152頁。

(12) 同上82～89頁。

(13) 警視庁編『明治二十五年 警視庁事務成績』（警視庁、1894年）134～135頁。

(14) 警視庁編『明治二十六年 警視庁統計書』（警視庁、1895年）74～79頁。

(15) 警視庁編『明治四十五年・大正元年 警視庁統計書』（警視庁、1913年）71～81頁。

(16) 総監官房文書課編『大正五年 警視庁統計書』（警視庁、1917年）48～51頁。

(17) 総監官房文書課編『第三十七回 警視庁統計書』（警視庁、1928年）103～109頁。

(18) 警視総監官房文書課統計係編『第四十七回 警視庁統計書』（警視庁、1938年）76～77頁。

(19) 前掲『新潟県の百年』239～240頁。

(20) 前田健太郎編『東西浴場物語』（浴場新聞社、1929年）44～48頁。なお、「三助物語」は1929年1月6日の『読売新聞』に掲載された森山勝太郎（東京府三河島在住）の投書を転載したものである。この森山も浴場関係者だったと推察できる。

(21) 岩本通弥「風呂屋に働く人びと―銭湯の民俗誌的考察―」（山田幸一監修『いま、むかし銭湯』ＩＮＡＸ、1988年）。

(22) 戦後の浴場業界の構造は前掲『湯屋番五十年』、『東京銭湯三國志』を参照。

(23) 前掲『東京銭湯三國志』155～161頁。

(24) 松岡叫天「湯屋営業と其湯銭とに就て」（『東京』第7号、1903年12月）。

(25) 前掲「三助物語」、「風呂屋に働く人びと」、『新潟県史 通史編8 近代三』276～278頁など。

(26) 前掲「湯屋営業と其湯銭とに就て」。

(27) 三助某「湯屋の三助は何うして金を残すか」（『商業界』第12巻第1号、1909年7月）。三助某も「頼まれいば越後から三助が来る」と述べており、同時期に新潟県人が根を張っていた様子が窺える。また、同記事は越後三郎「湯屋の三助が成功する所以」として『新公論』第24年第8号（1909年8月）にも転載されている。

(28) 前掲「風呂屋に働く人びと」。

(29) 変装記者「湯屋の三助となる記」（『新公論』第27年第4号、1912年4月）。

(30) 前掲「湯屋営業と其湯銭とに就て」。

(31) 同上。

(32) 前掲「三助物語」。

(33) 前掲『東京銭湯三國志』130～145頁、前掲『絵でみるニッポン銭湯文化』24～25頁。

(34) 前掲「都市における同郷者集団の形成と故郷観」。

(35) 改訂中之口村誌編集委員会編『改訂中之口村誌』（中之口村、1987年）688～689頁、695～696頁。

(36) 同上699～700頁。

(37) 前掲『新潟県史 通史編8』276頁。

(38) 西蒲原郡の概要は小島太郎一編『西蒲原郡志』（新潟県西蒲原郡教育会、1907年）を参照。

(39) 東京浴場信用組合編『昭和十二年五月 組合員名簿』（東京浴場信用組合、1937年）、東京浴場信用組合編『昭和十三年五月 組合員名簿』（東京浴場信用組合、1938年）。

(40) 前掲『半世紀の思いで』23～27頁。

(41) 浴場名簿 c 以降、富寿の湯の屋号は「富士の湯」となり、経営者は湧井いちとなっている。

(42) 例えば、戦後に新潟浴友会の会長を務めた長沼三郎は、修業時代、激務で体調を崩し、一度郷里の道上村大字河間に帰ったという（長沼三郎「過ぎ去れば走馬灯の如し」、字誌編集委員会編『字誌 河間の今昔』新潟県西蒲原郡中之口村大字河間、1991年）。

(43) 前掲「風呂屋に働く人びと」。

(44) 同上。